
可憐な王子の結婚行進曲

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可憐な王子の結婚行進曲

【Nコード】

N2744K

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

可憐な王子シリーズ第三弾。

無事に婚約まで辿りついたアドルバードとレイ。これで甘い恋人生活が待っている——はず、が。

そう簡単に進むはずがない！ むしろなかなか会えない毎日が続く二人。二人の将来はどうなる！？

1：あの日の空に似てる

窓の向こうは、眩しいくらいの青空だった。
ハウゼンランドの短い夏の青空だ。澄んだ青空は自分や妹の瞳の色によく似ている。

「なあ、レイ」

窓の外を見つめたまま妻を呼ぶと、「なんですか」といつもと変わらぬ返事がある。

それだけのことに頬の筋肉が緩んでしまう。これだからあちこちから茶化されるのかもしれないな、なんて思う。

「今日の空、あの日の空に似てる気がしないか？」

レイはゆっくりとこちらに歩み寄って来る。結われないまま背中に流された長い銀色の髪はいつまでも色褪せないまま、美しさを保ち続けている。その一房を持ち上げて、手のうちで少しもてあそんだ。
「あの日、ですか？」

柔らかく微笑みながらレイが問いかけてくる。こちらの答えの検討はついているのかもしれない。いつだって彼女には隠し事が出来ないのだから。

「俺達が結婚した日」

短く答えると、レイは窓の向こうの空を見上げる。

「ああ——……そうですね。よく似てます」

まるで遠いその日を懐かしむような瞳に、思わず笑みが零れた。

「おまえもそう思うんなら、間違いないな。この様子なら、今日の

結婚式も上手いきそうだ」

愛しい人を抱きよせて、微笑む。そうですね、という同意が彼女からも得られたので安心だ。

「私達の時でさえ、いろいろありましたけど、なんだかんだで上手いきましたからね。それに比べれば楽に進んでいると思いますよ。年若いのは、不安なところですが――」

「おまえに似てすっかりしてるから、大丈夫だよ」

こめかみに口づけを落としながら言うと、アドル様、と諫めるような声が漏れる。いいじゃないか、と言おうとしたところに、コンコンと無粋者が扉を叩く。このタイミングで顔を出す人間など限られているが。

「お父様、お母様――あら、お邪魔だったかしら」

返事もきかずに扉から顔を出した少女は両親の姿を見るなり笑う。光の加減で銀色にも見える金の髪は綺麗に結いあげられ、薄紅の薔薇が飾られている。

「個人的にはちよつと邪魔」

「あら嫌だわ父様。可愛い娘が挨拶に来たっていうのに邪険にしますの？」

相変わらず返答はどこかの妹を思い出させる可愛い娘だ。

「まったく、今日の主役がそんなにうるうるとするものじゃない。少しは大人しくしていなさい、フランドール」

夫の腕の中からするりと抜け出したレイが娘に歩み寄りながら、呆れた顔でそう言う。

「はい、もちろん心得ておりますわ。けれどやはりお二人にはきちんとご挨拶をと思ひまして」

につこりと微笑むその姿は、まさに大陸で謳われる「金の姫」に相応しい。

「それに、主役というのは出番まで暇なものなんですもの。親子で仲良く会話を楽しみつつ——出番を待つというのも悪くないと思いますせん？」

外はすでに招待客で賑わっている。娘の未来の夫——未来の息子はおそらくその応対で慌ただしいことになっているのだろう。

「何か聞きたいことでもある顔だな？」

レイが苦笑しながら娘に手を差し出す。エスコートの癖がついてしまっているのは、アドルバードとしてはなんとも言い難い。

「ハウゼンランドは今でこそ大陸で知らない者はいないほどの国ですけど——お父様の時代はそうでなかったと聞いております。それに、お父様とお母様は以前は主従の関係であつたとか、お母様は本来ならお父様と気安く話せるほどの貴族ではなかったとか、今まで聞いた話だけでも波乱万丈な人生だったのは存じ上げておりますわ」

人の口から聞くと結構凄い話だなあ、と他人事のようにアドルバードはしみじみと思った。

「だから、お二人がそんな逆境を乗り越えてまで成し遂げた結婚について、詳しくお話いただきたいと思ひまして。婚約までの話はお二人も叔母様もお話してくださいますけど——それ以降の話は聞いたことがなかったと、思い出したものですから」

可愛い娘は小首を傾げておねだりモードになっている。

話したくなかったから話さなかった、というわけではない。話していなかったんだな、と今更ながらに思うくらいだ。

「……てつきりアドル様が話していると思つてました」

レイが少し驚いた顔でアドルバードを見る。

「おまえこそ——……っておまえはあんまり話さなかったな。リノルも言つてなかったんだ」

ふうん、と呟いて、アドルバードは苦笑する。

レイと二人で顔を見合わせて、今となっては随分と昔になってしまったあの頃を思い出す。そう、あの日もこんな晴れた日だった。

「そうだな、どこから話そうか——……」

どちらからともなく口を開き、そして長い昔話が始まった。

1：あの日の空に似てる（後書き）

はじめましての方、お久しぶりですの方もこんにちは。青柳朔です。

前作が完結してから一年近くが経過しました。

連載という形で続編は書かない、と宣言したのにも関わらず、始まります。第三弾。

それというのも、前作終了後にぽっかりと私の脳内から消えてしまったはずの彼らが再び騒動を起こし始めたからでございます。

それならば私は生みの親として、彼らの進む道を追ってこうして物語を綴ろうと思います。

前作を愛してくださった方々、ここで初めてお会いできた方々とともに、破天荒なアドルバード達を見守っていただけたいと思います。

また長い付き合いになりそうな予感ですが、どうぞよろしくお願いします。

皆さまの読書のひとときのお供となれたのなら幸いです。

2：こっちは可愛い婚約者がいる！

それまでは、いつも傍にいて当たり前存在だった。

そしてそれは、いつまでも続くものだと思っていたし、そうなる為に今まで努力してきたと言っても過言ではなかった。

それなのに。

「ちくしょおおおおお！　　いいかげんにしないともう禁断症状が出る！　レイに会わせる——！！」

机に齧りつきながらハウゼンランドの王子であるアドルバードは絶叫した。

身長は愛しい人を追い越して、可愛らしさの残る顔立ちはしているものの、立派な青年へと成長している。十八歳になった記念のパーティーでレイとの婚約も発表した。それからめくるめく甘い日々——のはずだったのに。

「落ち着いてください、アドル様。姉さんも騎士という立場から王子の婚約者へと変わって慌ただしいんです。お妃修行だのなんなのって増えて剣術の稽古が出来ないって言ってましたから」

「うるさい黙れルイ。おまえはいいよな！　ちよくちよくリノルに会ってるんだろ！？　俺はもう十日もレイに会ってないんだよ！

補充しないともう持たない立てないやる気が出ない！」

机をばしばしと叩きながらアドルバードはルイに八つ当たりする。ルイといえばパーティーの後ハウゼンランドに残っている。もともとアヴィラでの手続きはほとんど済ませてきているらしく、現在は婿入りの為の滞在という扱いになっている。

「そりゃあ、アドル様と姉さんの事情とは違いますし。二人とも忙しいようですけど、こちらはそれほどでも。それに国同士の体面もありますから」

申し訳なさそうに笑うルイはもう騎士の服を着ていない。アドルバードと変わらぬ立派な服だ。会ってはいないがレイも——ドレスを着ているのだろう。

「だからそんな奴の慰めなんかいらない！　レイに会わせる——！　」

悲鳴にも似た叫び声にルイははあ、とため息を吐き出す。リノルアースと会わない時間はこうしてアドルバードの手伝いをしているのだが、ここ数日はずっとこのご乱心っぷりに悩まされている。

「うるさいわよ、アドル。廊下まで聞こえてるわ、恥ずかしい。……あらルイ。こちらにいたの？」

ノックもせずに扉を開けて顔を出したリノルアースが呆れた表情でアドルバードに言う。後半のルイへのセリフに異様な冷たさを感じて、ルイは硬直した。

「え、あ、はい。その……リノルアース、様？」

どうかしましたか、とルイはおずおずと問いかける。

「いいえ？　何も？　午後は私とお茶をする予定だったはずだけど、まったく全然来る気配がないからこうして兄に愚痴りに来ただけよ？　ヴィルハザード様？」

につこりと微笑みながらリノルアースは物凄く怒っている。ええええええええ！？　と慌ててルイは時計を確認して——その針が既に昼過ぎをさしていることに絶望した。

「すすすすすみませんっ！　き、気づかなくてですね！？」

「そうね、あなたは私よりもアドルと一緒にいる方が楽しいのよね。可愛い恋人を待ちぼうけさせてアドルのくだらないお守りをするんだものね。いいわよお別に。いつそアドルと結婚すれば？」

完全に怒っている。

「まっぴらごめんだ！　こっちには可愛い婚約者がいる！」

「それは俺のセリフですよアドル様！」

不機嫌なりノルアースを前に男二人は口論を始める。しょうもない、と呆れたリノルアースはどかりとソファに座って足を組んだ。

「お茶」

そして短く命じた。

「あ、はい！」

その命令に即座に反応したのは悲しきかな大国の王子であるはずのルイだった。慌てて部屋を出ていく姿を見ながらリノルアースがため息を吐き出す。

「人の婚約者盗らないでくれる？ お兄様」

頬づえをつきながらリノルアースはアドルバードを見上げた。冷たい目は同情なんてもの欠片も宿していなく——明らかに怒っている。

「盗ってない。少し会えないくらいでそんな不機嫌になるなよ」

「少し？ へえ、少し？ 二年も会っていないかったんだからその分埋め合わせようとして何が悪いの？ あんたらなんて二週間やら十日程度のもんでしょうが。レイだって弱音は吐いてなかったわよ」

「おまえだって人の婚約者に勝手に会ってるんじゃないか！」

リノルアースの些細な言葉にまで反応すると、本が飛んできた。

「うるさい。裁縫の先生が一緒だから同じ時間に教わってるだけよ」

飛んできた本を間一髪でよけると、壁に当たって鈍い音がした。

あれが頭に当たっていたらと思うと冷や汗が背筋を流れていく。

「貴族の令嬢だって言っても弱小だし、騎士だったしね。一国の妃にまでなるとなれば覚えることはたくさんあるでしょうよ。話を聞いている限りどれも優秀な成績でいらっしゃるようですけど？ そのお相手は情けないわね」

「そりゃあ……」

毎度ではなかったものの、レイは護衛としてアドルバードが受けていた授業を聞いていることが多かった。政治学、帝王学、経済学——その他もたくさんだ。出された課題が分らずに躓いていたところを教わったこともある。

「……頭いいからなあ」

下手すると俺よりも、と呟いてなんだか落ち込んでくる。

「正直な話、アドルって外見以外はレイとつりあってないわよねー」
実の妹の辛辣な一言に胸はかなりえぐられた。中身はまだまだってことですか。

「見た目だってもう少し身長が欲しいところよね。まあまだ成長期みたいですから？ その点はいいかもしれないけどね」

「リノルさん、かなり泣きたくなるのでやめてください……」

何よりもレイに相應しい男になろうと努力してきたというのに、それをまだ認められないとなると泣けてくる。

「こんなこと言われたくないなら会えなくても頑張rinaさい」

ふん、とりノルアースは胸を張って堂々と言い切る。リノルアースなりの励ましなのだとはい分かるが心に刻まれた傷は決して浅くない。

「……頑張らせていただきます」

はあ、とため息を吐き出して肩を落とすと、コンコンと律儀にノックする音が聞こえる。

「お茶をお持ちしました。それと――」

「失礼します」

使用人か何かと勘違いしそうになるルイの声と、聞き間違えるはずもない、凜とした声。

「レイ！」

ぱつと顔を上げると、ルイと一緒にレイが立っている。前よりも伸びた髪はそのまま下ろされ、質素だが綺麗なドレスを着ている。思わず駆け寄ろうと立ちあがると、レイはにっこりと冷たい微笑をアドルバードにむけた。

「お久しぶりです、アドルバード様」

そのたった一言で、アドルバードはレイが怒っていると悟った。

彼女がアドルバードの名前を略さない時は、怒っている時か真剣な時だけだと知っている。

「レ、レイさん？」

「ルイからいろいろと聞かせていただきました。いつまでも子どものように駄々をこねるのはやめてください。先日の喧嘩の一件で少しは成長したように思っていたんですがそれも私の勘違いだったということでしょうか？」

何を密告しやがった、とルイを睨むが、ルイは素知らぬ顔でリノルアースへお茶を差し出している。

「あ、会えなくて寂しいと思うのは当然だと思うが！　こ、恋人だし婚約者だし！」

「世間一般の婚約者は毎日会いません。一、二週間会わないこともあるでしょうね」

う、と言葉に詰まる。王子という立場から考えればそれこそ婚約者といっても頻繁に会えるものではない。相手が他国の王女だったりすれば数カ月単位にもなるだろう。

「自分の希望を声高に叫ぶ前に、自分の仕事を終わらせてくださいね。見張りがいなくても仕事出来るようにならなければ話になりません」

久々の再会だというのに冷たい恋人に、心の中は猛吹雪だ。もう少し、こう、甘い時間になっても良いと思うのですが。

「精進します……ところでレイ」

これから時間は、と問おうとしたところでレイは時計を見る。

「すみません、まだ授業が残ってますので」

アドルバードの言葉を遮り、レイは忙しそうに部屋から出ていく。ほんの数分間の逢瀬に背後では落ち葉がひゅるりと舞い落ちた。

「……報われないわねえ」

「さすが姉さんといか言いようがないです」

お茶を飲みながら硬直したアドルバードを観察する二人は感心す

るように眩いた。

3：普通の人達じゃないんだから

——少し、きつく言いすぎたかな。

アドルバードの部屋を離れ、廊下を歩くレイは苦笑しながらそんなことを思う。

しかしここで厳しく言うておかなければ、と思ってしまうのは騎士だった頃の癖が抜けていない証なのだろう。

「少し反省してもらわないと」

はあ、とため息を吐き出して静かに廊下を歩いていく。

「俺とレイって恋人じゃなかったっけーなんか恋人とか婚約者とか通り越してただの知り合いみたいなレベルまで落ちてる気がするんだけどどうなのこれ。ていうかあんな数分じゃレイ欠乏症も治らないんですけどむしろ悪化した気がするんですけど」

壁にもたれて影を落としながらアドルバードはぶつぶつと呟いている。

「うるさいわね。レイは忙しいの。あんたも本当は忙しいの。大人しく仕事してなさいよ」

リノルアースが見かねて物申すが兄の耳にはまるで届いていないようだ。

「重症ですね」

「この根性無しが」

けっ、とリノルアースが顔を顰める。リノル様、と形だけルイがたしなめるが本人はまるで気にした気配はない。

「落ち込んでるだけで仕事もしない子にはご褒美はいらないわよねー？ 実はもうすぐあるシェリーの結婚式で着るドレスの衣装合わせ

せにレイも参加する予定だったりするんだけどそれを教える義理もないわよねー？」

わざとらしいくらいに大きな声でリノルアースは呟く。

もちろんそれに反応しないアドルバードではない。物凄い速さでリノルアースに近づき目を輝かせる。

「そのあたり詳しく教えてくれると嬉しいんだけど！」

現金なやつ、とリノルアースは呆れてため息を吐き出す。

婚約発表から一カ月と少しが経った。ほぼ同時期に婚約を発表したシェリスネイアとウィルザードは四ヶ月後に結婚式を挙げる予定だ。急な日程になったのもヘルダムが国内外に力を付けていくための下準備もあるのだろう。実際、リノルアースとルイの挙式も半年後に迫っている。

「ネイガスから私もルイもアドルもレイも招待されてるじゃない。それに着ていくドレスと一緒に作るだけよ？ レイはあんまりドレスも持っていないし」

「だからその日取りとかをだな！」

喰いかかる兄に鬱陶しさを覚えながらリノルアースはアドルバードの額を人差し指でつつく。

「そーいうことは本人に教えてもらいなさい。大体あんた会えないって騒ぐばかりで行動してないじゃないの」

「行動したくても出来ないんだろうが」

会いに行きたくてもルイが見張りに来ていたり仕事を山積みになれたり。

「会うだけが行動じゃないっての。毎日こまめに手紙を送るとか、プレゼントをあげるとか、普通の恋人がするようなこと何一つしてないじゃない！」

リノルアースが憤然としてアドルバードを叱りつける。

手紙？ プレゼント？ と頭の中で繰り返して、ああ、と納得する。

「……そういう普通のことじゃなかった」

「だから馬鹿なのよ！ 馬鹿！」

乙女心理解してないんだから！ と怒るリノルアースを前にレイでもそんなこと考えるんだろうか、とぼんやりと思う。

「やったほうがいいのか、やっぱり」

「当たり前でしょうが！」

ごつん、とりノルアースに頭を殴られる。ここまで怒られることなんだろうか、と思うあたりがまだ自覚が足りない。

「レイの場合プレゼントをあげると逆に怒られそうだけど。でも手紙を出しても罰は当たらないわよ！」

確かに無駄にプレゼントをあげ続けたりなんてしたら無駄遣いするなと怒りそうだ。

「そんなこといったらレイだって手紙の一つも」

「女の方から渡すのが当たり前とか思ってたら本気でしばくわよ！？」

リノルアースが凄い形相で睨んできたので大人しく小さくなる。

ルイがまあまあ、と怒れるお姫様をなだめに入った。

「普通の人達じゃないんだから普通の恋愛しようとしても分からないくて当たり前ですよ。このあたりで落ち着いてください」

……なんだかものすごく失礼なことを言われたような気がするんだが。

ルイは実は大国の王子様でした、なんて一番非常識な立場のくせに一番常識人のような顔をするものだから腹立たしい。

「……喜ぶかな」

手紙を送るなんて、そんな些細なことだけで。

「自分だとしたら、で考えなさい。恋はするものだけど、愛は与えるものっていうのが私の持論」

ふん、と胸を張る妹に若干一名ものすごく物言いたげな顔をした奴がいた。

首を掻きながら机に向かう。未だに手のつけられていない書類の山にため息しか出てこない。

「考えておくよ」

とりあえずは、と付け足すとリノルアースは眉を顰めて実に可愛らしくない顔になる。おおかた「かっこつけ」と思っているんだろう。

「それで、いつなんですか？」

アドルバードの部屋をあとにして、廊下をルイと二人で歩いていると突然問いかけてきた。

「何が？」

「何がって……その、ドレスの衣装合わせの日ですよ」

ルイが少し照れたように答えたので、リノルアースは「ああ」と納得する。参加してくれるつもりだった、ということだろうか。それこそ『恋人』のように。

「二週間後よ。オーダーメイドだし時間かかるもの。何？ 興味ある？」

茶化すように問いかけると、ルイが「当たり前でしょう」と顔をそらしながら答えた。

「綺麗な姿を見れば嬉しいです。けど、あんまり他の男に注目されるようなのは困りますし」

「困るって誰が？」

分かりきった答えだというのにリノルアースはにんまりと笑って質問を重ねる。この人は、とルイはすっかりリノルアースの手のひらの上で転がされている気分だ。

「もちろん俺が、です！ 俺で遊ばないでください、リノル様」

「遊ぶなんて、そんな恐れ多いですわ、ヴィルハザード様？」

リノルアースはルイの左腕に自分の腕を絡ませ、ルイを見上げながら笑う。

「その名前で呼ぶのはやめてください」

好きじゃないので、と答えるとリノルアースは淡く微笑む。

「……知ってるわ。別に心配しなくても派手な服なんて着ないわよ？ さすがに花嫁より綺麗になっちゃったら申し訳ないしねー」

花嫁はあのシェリスネイアだというのに、そんなセリフが出てくるあたりがさすがのリノルアースというところか。

「ルイがいがいまいが、あんたの意見なんて無きに等しいわよ？ せっかくドレス作るんだもの。自分の好きなように作るわ」

「……まあ、そうでしょうけど」

はつきりと言われるとそれはそれで悲しいというか。

「でも、そうね。結婚式の時は参考程度にしてあげなくもないわ」

私達も準備しないといけないのよねー、と世間話のようにリノルアースが呟く。

「まあ、そうですね……って、はい？」

同じように聞き流しそうになってルイは慌てる。

「あら、別に意見がないならいいけど。私はたっぷり意見するからそのつもりでよろしく」

「え、あ、はい。ってそうじゃなくて」

「何？」

リノルアースがけろりとした顔で首を傾げるので、ルイは言うのも恥ずかしくなってきた。だがもう飲み込むことは許されない状況になっている。

「……いえ、その。結婚とかリノル様の口から言われると、現実なんだなと思って」

我ながら女々しいな、と赤くなりながらルイは呟く。

「……じゃあ何、あんたは壮大な夢でも見てたと思ってたの？」

リノルアースが物凄く呆れた顔でルイを見上げる。まさか「はい」とは言えずにルイはただ曖昧な微笑みで誤魔化すことにした。

こうしていること自体が夢みたいだ、なんて。

言ったら今度は殴られそうだ。

4：「褒美よろしく」

「レイ様」

家に帰ろうと城の中を歩いていたら、背後から話しかけられた。振り返ればそこにいたのはアドルバードの侍女のロアナだ。レイ自身もよく知っている。

「……ロアナ。あまり改まった話し方をされると違和感があるんだが」

「嫌ですわぁ、だって未来の王妃様にまっさか今までのように接しろという方が無理あると思いませんか？」

ころころと笑いながら以前と変わらぬ態度で話し始めるロアナに、レイは思わずため息を零す。

「それで、何か？」

「レイ様ってばせっかくお綺麗にしてるのに口調はそのままですのねー。それでは侍女や女官のファンからの人気は衰えませんか？」

「……何か用があったのでは？」

とりあえず話が終わらないので無視する。

「はい、こちら、アドルバード様からお預かりして参りました」

レイを怒らせると怖いということはそこそこ長い付き合いのロアナは熟知している。引き際は見事と言っべきか。

差し出された封筒に、レイは思わず微笑む。

——リノル様から、何か入れ知恵でもされたかな。

「ありがとう」

素直に受け取って、封を切る。この場合はすぐ読んだ方がいいんだろうと判断した。

案の定、手紙はそれほど長いものではなかった。些細なことでもいいから連絡くらいはとりなさい、とアドルバードに説教しているリノルアースの姿が想像できて苦笑する。

ほんの数行しか書かれていない手紙に、それでも満たされるような気持ちになるのは——リノルアースの策略にハマってしまっているということなのだろうか。

『会いたいけど、また怒らせたんじゃないからそこそこ頑張る。おまえは少し頑張り過ぎ』

反省はしているんだろうと分かる文面に、やっぱり少し怒り過ぎたかもしれないな、なんて甘い結論が生まれそうになる。

『近々ドレスを作るって聞いたけど、できたら——俺もその時一緒にいたいです。そのうち俺からもドレス贈りたいんだけど、駄目かな』

贈り物、というあたりもリノルアースの発案だろうか。ドレスなんてそれほど持っていなかったから、今現在は急ぎで作らせているハウゼンランドの一般女性よりも背の高いレイは既製品だと合わないのだ。

『最後に。頑張るからご褒美よろしく』

最後の一文に、思わず笑ってしまった。

大人しくレイが読み終わるまで待っていたロアナが呆れた顔でため息を吐き出す。

「……王子はなんと?」

また馬鹿なことでもしたんでしょうか? と問いかけてくるあたり、アドルバードの威厳は欠片もないのではないだろうかとレイは心配になった。

「なんてないことですよ」

くすくすと笑いながらレイは答える。

「了解しました、とだけお伝えして」

「あら、それだけですか？」

「充分だよ」

あとは一応返事を書くから、と言うとロアナも納得した様子で去って行った。

その背中を見送って、さて、とレイも歩き出す。城門の外に馬車を待たせているはずだから行かなければならない。騎士だった頃は騎士団の宿舎に部屋があつたし、アドルバードの部屋の隣で控えているのが常だったが——今となつてはどちらも使っわけにはいかない。今は王都にあるバウアー家の別邸を使っている。普段あまりにも使わないので住む環境を整えるだけで時間がかかったが。

領地にある本邸からマーサが来てくれている。あまり帰りが遅いと心配かけてしまう。

「姉さん？」

するとまた呼びとめられた。

どうしたものかな、と苦笑する。

「何か御用でしょうか？ ヴィルハザード様」

振り返りながらそう言うと、声をかけた主は——ルイは心底嫌そうな顔をしていた。

「随分な顔だな」

苦笑すると、当たり前でしょう、と拗ねたような声でルイが答える。

「姉にそんな他人行儀な態度とられたら複雑な気分にもなります。

リノル様も時々いやがらせのようにそっちの名前を使ってくるし」

「意識させようとしてるんだろ。おまえはもう騎士じゃないんだから」

事実、レイはバウアー家の別邸を使っているが——ルイは城の迎賓館に部屋を用意されている。国王陛下は「形だけでもちゃんとしないとね」と笑っていたただけだから、ルイがバウアー家に戻っても文句は言わないだろうが。

しかし逃げ道を塞ぐように父であるディークが「自分で選んだ道だ。帰って来るな」と一喝してしまった。

「それで、今から帰るところですか？」

「ああ、馬車を待たせてるから行かないと」

自分で馬に乗った方が速いのにと、思いつつ口には出さない。少なくとも婚約が決まったばかりの今、レイ・バウアーの価値を下げるような真似だけはするわけにはいかない。

「引きとめてすみません。最近は何もあまり会っていなかったから」
「……そうだな。リノル様と会うのが少し多いくらいだから」

それも授業が同じだったりするだけで。おそらくリノルアースの厚意なのだろう。姫の教育係は皆優秀な人達ばかりだから。

「……余計な、お世話かもしれませんが」

ルイがおずおずと少し躊躇うように口を開く。

「あの後、アドル様は真面目に仕事してましたよ？」

まったく。

思わずまた笑みが零れる。

周囲から見て、そんなに危ういのだろうか、自分たちは。

「大丈夫だよ」

信じているから、とまでは口にしない。けれど何か弟には伝わってしまったのだろうか——ルイは少し照れたように「失礼しました」と苦笑する。

「じゃあ、気をつけて」

待たせてるんでしょう？　と言われて、外で待たせたままの馬車の存在を忘れていた。やはり時間が自由にならない点からいっても馬車は不便だ。

「おまえも、人のことばかり気にかけてないでリノル様のことを大事にしろ」

去り際に一言添えると、ルイは「言われなくても」と心外そうな顔をした。その様子からしてあちらも大丈夫なんだな、と少し安堵する。

じゃあ、と挨拶して急ぐ。人を待たせるのは性に合わない。

「悪い、待たせた」

御者にそう言いながら馬車に入ると、「いいえ」と微笑まれる。父と大して年の変わらないこの使用人は、それこそ私もルイも小さな頃から知っている。

乗り込むと、タイミングを見計らったように馬車が動き出す。

小さな窓から見える外はすぐに速度を上げていって――肌に風を感じながら駆ける方がいいのに、と思った。

コルセットも美しいドレスも華奢なヒールも。

どれも望んだものではない。必要なものだという認識があるだけで。

腰に剣の重みのないことには未だに慣れないでいる。どこか不安定で安心しないのだ。もちろん護身用に、と短剣は常に忍ばせてはいるけれど。

『女』になってしまったことが、少し惜しいなんて。

そんなことあの人に漏らしたら、傷つけてしまっただろうか。

ぼんやりと考えている視界の端で、早馬が馬車とすれ違った。

見えたのは一瞬だけだったが、騎士団の制服だったようだ。どこかの領地からの知らせだろうか——なんて、もう関係のないことをまた考えている。

癖だな、なんてかつての自分をどこか羨んでいることにわざと気づかないふりをした。

5：面倒なことになりそうだよ

慣れないことをしたせいだろうか、山のように溜まっていく書類に囲まれながらアドルバードは苦悩していた。

「もつと別のこと書けば良かった気がしてきた……いやでも今更齒の浮くようなこと書くのもっていかそんなこと書いたら恥ずかしさで死ねる」

だって言うだけならタダでも、手紙にしたら残ってしまうわけだし。日々口になっている恥ずかしいことは全て棚に上げた発言だということに本人はまるで気づいていない。

そんなものを後々の自分が見た日には穴に入っても湧き上がる羞恥心を消すことはできなくなるんだろう。それが容易に想像できたからあまり当たり障りのないことを書いたのだが――。

「だ――！！ もう過ぎたことだ！ 知るか仕事仕事――！」

いつまでも悩んでいるのは性に合わないし、と羽根ペンを持ち上げてサインを書きこんでいく。

気持ちを切り替えてしばらくした頃、コンコンと扉を叩く音がした。

「どうぞ」

短く答えると、扉を壊すのではないかという勢いで一人の男が駆け込んできた。

刈り上げられた短い茶髪、その髪の色に似た薄茶の瞳の男には、アドルバードも覚えがあった。

「……ダン、だよな？ どうした、そんなに慌てて」

駆けこんできた青年――ダンは騎士団の青年だったはず。今は各地との連絡係を務めていたような気がするが。

「ア、アドルバード様」

空気が違うのがアドルバードにも分かった。

気真面目なダンがロクな挨拶もなくただ混乱しているなんて、そうあることではない。

「何があった」

短く問うと、ダンは握り締めていた書をアドルバードに差し出す。急いで来たのだろう。息は途切れ途切れだ。

書を受け取って、すぐに目を通す。

はあ、とため息を吐き出して、アドルバードは顔を覆う。

息を切らしているダンに飲み物を持つてくるように侍女に頼み、アドルバードは執務で乱れていた衣類を整える。

「おまえは少し休んでいてくれ。俺は少し出てくる」

労うようにダンの肩を軽く叩き、アドルバードは部屋を出る。

たった今届けられた書に記されていたことを国王へ伝えるために。

——レイ。

面倒なことになりそうだよ。

胸の中で恋人に呼びかけながら、アドルバードは苦笑した。

レイの朝は早い。

もとより早かった騎士の頃と変わらぬ時間に起きなければならぬのは、身支度にそれだけ時間がかかるようになってしまったからだ。

「さてお嬢様、今日はどの色のドレスになさいます？」

にこにこと上機嫌でクローゼットからドレスを選び出すマーサを見ながら、レイははあ、とため息を吐き出す。正直な話、めんどくさい。

「マーサの好きなものでいい」

おざなりな回答を出すと、マーサがにっこりと笑って薄紅色のドレスを目の前に突き出してくる。

「ではこれでもいいんですか？ お嬢様」

そんなもののいつの間に用意したんだとレイは顔を青くしながら首を横に振った。リノルアースと違って社交界に顔を出していた頃からピンクやらオレンジやら——可愛らしい色のドレスに袖を通したことなんてない。

「まったく、お嬢様も少しはこういったことに関心を持っていただかなくては！ もう騎士ではないのですからね」

「……分かってる」

返事が苛立ったようになってしまったのは仕方ない。剣を手放すという選択は、随分前から分かっていたことだ。

マーサには心の中の不満が伝わってしまったのだろう、苦笑されて、少し伸びた髪を優しく梳かれる。

「殿下は、お嬢様から剣を取り上げるような方ではないでしょう？」

少しの辛抱ですよ」

分かっている。そう答えることすら馬鹿みたいな気がした。

アドルバードはもとよりレイから何かを奪い取るような存在ではない。むしろたくさんのものを与えてくれる人だ。今剣を遠ざけているのは——黙っていない周囲を納得させるまでだ。

貴族の令嬢として必要最低限の作法は身につけている。もちろん騎士として教育も受けた。けれどそれは『一国の妃』になる為のものではない。今のレイに足りないものは、たぶんアドルバード以上にあるだろう。

アドルバードは十八歳の誕生日を境に、正式な王位継承者となっ

た。王子と呼ばれていた頃からそれは当り前のことではあったが――国王陛下が正式に、次の国王に任命した。だからこそ彼にも課される仕事が増えたのだ。必然的に民はアドルバードを殿下と呼ぶようになった。

「お嬢様は少し肩の力を抜いた方がよろしいですよ。まったく、勉強に熱心なのは良いことですけど、教師の方々がもう教えることはない」と匙を投げてばかりだと聞いておりますよ？」

「……短期間で学ぶことはいくらでもあるのだから、早く習得するに越したことはないだろう」

「限度があります。その熱心さを少しでも殿下に分けてあげてくださいな。恋人に会えなくて今頃泣いていらっしやるかもしれませんよ？」

十八歳になった一国の王子に向かって何を言ってるんだ、とレイは苦笑する。マーサの中ではいつまでも自分達は子どものままだろうな、と。

支度を済ませ城へ行くと、急遽今日の授業がなくなった。

曰く、『もう教えるべきことは教えました』と。

またマーサに叱られるだろうか、と思いながら足は自然とアドルバードの部屋へと向かった。午後受ける予定になっている授業までは時間がある。昨日少し冷たくしすぎたかもしれない、思っていないかもしれない。

自分らしくない言い訳を繰り返しながら歩いていけば、すぐに部屋の前まで辿りつく。

今更緊張することもないだろうと、コンコン、とノックするが、返事はない。

「アドル様？」

いないのだろうか、と呼びかけると、室内からはどたばたと騒が

しい音が聞こえる。もしかしたらノックも声も聞こえていないのかもしれない。

自己判断で扉を開ける。

「アドル様？ 何か——」

部屋の中は悲惨な有様だった。

「うえ！？ レイ！？ なんでここについていうか動くな危ないからそこらへんに今いろいろ置いてて——ってううわ！」

何か荷物やら書類やら普段の服やら剣やら。とにかくこれはどうやったら昨日から今日まででここまで散らかせるのか、というくらいに物が散乱していた。注意した本人のアドルバード自身が転びかけるくらいに。

「アドル様？ これは一体どういうことですか？」

呆れながら問いかけると、アドルバードは物を飛び越えつつレイの傍までやって来る。

「ちょっと急ぎでガデニア砦まで行くことになって。準備とかしつつ仕事しつついろいろやっていたら……一晩でこの状態に」

「ガデニア砦に？ 昨日の早馬で何か——」

騎士だった頃の癖でつい先を聞いてしまった。はっとして手で口を塞ぐが、もう遅い。重要機密であれば、アドルバードはレイに話すことはできないのだ。

「数日前から定期連絡が途絶えてるらしいから、様子見に行くだけだよ。一応あそこ俺の領地だし」

にっこりと笑いながらアドルバードは言う。いつの間にかアドルバードの腕がレイを包み込んでいて、本人は満足そうににこにこしていた。

「……………急ぎじゃないんですか？」

「急ぐから、充電しておこうかと」

迎えが来るまで、と言いながらアドルバードはこつんとレイと額を合わせる。身長が数センチしか変わらない今となつては、この体勢はかなり近い。

「アドル様」

たしなめるように名前を呼んだのにも関わらず、久々に邪魔者のいない二人きりの状況にアドルバードはご満悦だ。

これは何を言っても無駄みたいだな、とレイはため息を零す。

なんだかんだで自分もこの人には甘いな、と苦笑するしかない。

6：おまえの命は他の命よりも重い

ガデニア砦との定期連絡が途絶えた。

その知らせを見たアドルバードはため息を零した。

ガデニア砦はハウゼンランドの東にある国境付近の砦だ。ハウゼンランドの東は小国がある程度で、高野には多数の部族が国を持たずに生活している。部族同士での争いは後を絶たず、それゆえにハウゼンランドも常に警戒している国境だ。

しかも近年は一つの部族が勢力を増していると聞く。その勢いは近隣の小国を脅かすほどだというから穏やかではない。

昼と夜、定時の連絡がなかった。それは間違いなく異常だ。

王都から馬を急がせたとして、ガデニア砦までは三日かかる。アドルバードが今から出発したところで異変からは既に一週間経過してしまうことになる。

事は国防にも関わる。

だからこそアドルバードはすぐに父のもとへと向かったのだ。

執務室の椅子に座った国王陛下は、書類を見たまま息子の顔をちらりとも見ずに、一通りアドルバードの説明を聞いた後で「ふーん」と呟いた。

「……なので！ 俺はガデニア砦に急ぎ向かいます。いいですね！？」

やる気があるのかないのかまるで分からない父の反応に苛立ちながらもアドルバードは結論を下す。

「そりゃあ、あそこはおまえの領地だからね。責任はおまえにある。一日に一度は定期連絡をすること。あと護衛はつけてね。一応王子

様だし」

聞いていないように見えてちゃっかり聞いている父にさらに苛立ちながら「分かってます！」と答える。

「レイは連れてつちや駄目だから、ね？ 彼女ほど有能な護衛がないのは分かるけどさ。デークも王都を空けるわけにはいかないから、騎士団で腕っ節が強いの一人持つていくといい」

「改めて言われなくても分かってますって！」

レイはもう騎士団の人間ではない。アドルバードとの剣の誓いが反故にされたわけではないが、彼女は騎士であるまえにもう『王子の婚約者』なのだ。以前と同じ扱いをしていたのでは彼女の名に傷がつく。

まったく、信用されていないのか、と思いながら踵を返すと、「アドルバード」と真剣な声で呼びとめられる。

「おまえは王子であるということを忘れないこと。おまえの命は他の命よりも重い。この国の将来を負うという意味でね」

「……分かってます」

突然何を言い出すのだろう、と疑問に思いながらもアドルバードは答えた。

「……分かっているのならいいよ。気を付けていっておいで」

父は穏やかに微笑みながら手を振る。

首を傾げつつアドルバードは明朝には発ちます、と言い残して自室へと戻った。

あーあ。これじゃあレイに会う暇はないよなー。

せめて発つ前に一目会いたいんだけどなー。

そんな願いが通じたのだろうか。

準備もほとんど終え、ちらかった部屋の中で出立の時間を待つばかりとなった頃に彼女がやって来たのは。

「……アドル様」

ぎゅーっと抱きしめて満足していると、何度目になるか——レイがたしなめるようにアドルバードの名前を呼ぶ。

たしなめる意味以外にも少し困ったような響きまであるものだから——ああ、もう可愛いなあ、と馬鹿っぷりを発揮するわけで。

もう少し、と言いかけたところで部外者の咳払いが聞こえた。

「あー……お邪魔なのは重々承知の上なんですけどね。殿下、そろそろ出ないとやばいですよ」

てつきり二人きりだと思っていただけに、大いに驚いてアドルバードはレイを解放した。レイがあまり驚いていないのは気配で察していたからなのだろう。

「セ、セオラス！　少しは空気読め空気！」

顔を真っ赤にして騒ぎだすアドルバードに「すみません」と軽く答えている青年——セオラスは、レイもアドルバードも知っている騎士団の人間だ。短く切られた亜麻色の髪と意思の強そうな緑色の瞳が印象に残りやすい。

「これでも読んだんですよ。姐さんに怒られたくないし。姐さんの拳はかなりキツイっすから」

「その呼び方はやめると何度も言っただけだと思っただけが」

レイがはあ、とため息を吐き出しながら呟く。

「だって騎士団の連中は皆こうでしょ？　今更直りませんで。んじや殿下お借りします」

「……セオラスが護衛なんですか」

ちらりとアドルバードを見ながらレイが問う。彼女自身ディークが護衛につくとは思っていないだろう。

「ん？　まあ。ディークの推薦で」

「……父上の、ですか。私としては二人とも迂闊そうな気がするんですが」

小さく呟きながら他の名を上げたレイにアドルバードもセオラスも「あれ？」と首を傾げる。

「レイさん？ 迂闊って俺も含まれてる？」

「他に誰がいます？」

「姐さん？ 俺も？」

「ある意味でおまえはアドル様より迂闊で馬鹿だと思うが」
ざつくりと切られて二人胸を押さえる。切れ味は抜群だ。

「まあ、腕は信用できますから。その点は納得できますけど。……二人とも、急ぎではないんですか？」

「……レイ。今まさに恋人が遠くへ行こうとしているのにそれはなんか寂しいっていうかさあ……」

しょんぼりとしたアドルバードの肩を叩きながらセオラスは笑う。
あつさりと見送るレイの姿にアドルバードは泣きたくなる一方だ。

「姐さんが別れを惜しむってのはちよつと想像できないですよ、殿下」

「……いや、少し夢見てもいいんじゃないかなって」

涙を流して、とまではいなくても。少しくらい惜しんでくれても。

「アドルバード様？ セオラス？ 急ぎなんでしょう？」

につこりと微笑みながら再度問いかけてくるレイの顔は笑っているのに笑っていない。つまりは——怒ってる。

「……………ういっす」

「……………はい」

二人そろって小さく返事をして、部屋から出ていく。

レイは呆れた様子でその姿を見送りながら——無意識に口を開く。

「アドルバード様」

それは勝手にその人の名前を紡いで。

「ん？」

アドルバードは振り返りながら答える。青い瞳と目があって、自分でも何故呼びとめたんだろうと一瞬レイは固まった。

「あ……お気を付けて」

言ってしまった後で間の抜けたセリフだな、と思った。

それなのに、アドルバードは嬉しそうに笑う。

「いつてきます。……なるべく、早く戻るから」

手を振りながらアドルバードは急ぎ足で去っていく。

昔よりもう少しだけ頼りがいある背中に、レイは少しの間だけ魅入っていた。

7：でも、レイじゃない

「ひどいと思わない？ アドルってば可愛い妹の私には挨拶のひとつもなかったのよ！？」

アドルバードが発つてすぐ——時間を持て余していたレイはリノルアースに捕まった。

そして始まったのはアドルバードがいかに妹を蔑ろにしているかの愚痴だった。出立前に何もなかったのがよほど立腹らしい。

「仕方ないですよ、緊急だったんですから。本当は分かっているのにそうやって形だけは怒るんですよ」

ルイが紅茶を飲みながら呆れて呟く。直後に「いたっ」とルイが声を上げたのはテーブルの下でリノルアースに足でも踏まれたからだろう。

「レイには話す時間があつて私に会う時間はないっての！？」

「がちゃん、と音をたててカップをテーブルに置くと、リノルアースはぶつぶつと愚痴を続ける。

「話したといつても、私がたまたまアドル様の部屋に来たからであつて、あの様子では私にも何も言わずに行くつもりだったようですが」

「結果論よ！ どうせ短い間にいちゃこらしたんでしょ！」

可愛い妹に一言伝言でもあつて然るべきよ！ とリノルアースの怒りは収まりそうにない。帰ってきたらアドルバードは一発殴られるだろう。ブラコンのリノルアースとしては数日とはいえ兄に会えなくなるのだから——少しでも何かあつて欲しかったのだ、とレイもルイも理解している。

「……ガデニア砦って」

しばらく愚痴を続けたリノルアースは、ぼつりと口を開いた。

「東の国境にある砦です。アドル様の領地ですよ」

レイが答えると、リノルアースはふと考え込んでからまた口を開いた。

「大丈夫なのかしら？ 最近の東の情勢は穏やかではないでしょう？ 部族をまとめて国を作ったとか作らないとか」

「東の高野の、ですか？ 国が出来たという話はまだ正式に聞いた覚えはありませんけど」

ルイが首を傾げながら呟いた。長く南国のアヴィラへと行っていた彼はハウゼンランド周辺の情報には少し疎くなっているだろう。

「噂ではある程度の形になりつつあるとか——周辺の小国はかなり警戒しているようです。ハウゼンランドにも及ばない程度の小国では勢いに飲み込まれても不思議ではないですからね。東の大国は様子見のようです」

レイがするりと立ち上がり、棚から地図を取り出した。

北の山脈から中央の砂漠にいたるまでの土地はハウゼンランドのものだ。国土こそはそこそこある国だと地図上では分かる。そのハウゼンランドの三倍以上あるのがアルシザス。さらに大陸の南半分を占める大国がアヴィランテ。ハウゼンランドと並ぶ程度の小国がいくつか西にあり、中央砂漠を隔てた東に大国シン。シンとハウゼンランドの間には荒れた高野が広がり、数年前までは遊牧を生業とする部族と小さな小さな国がいくつかあった。

「ガデニア砦は国境という意味もあり定期連絡を欠かすことはありません。常駐の騎士はせいぜい二十人いるかいなか程度ですが」

「その程度なの？」

国防の要なのでは、という驚きがリノルアースの口から漏れる。

「東側からの侵略の可能性はかなり低いですから。シンがハウゼンランドを手に入れても得るものもない。かつ周辺の小国では勝負にもならない。部族ならばさらに、です。部族が結束して国を為そう

としても――まずは小国を攻め、国土を広めるでしょう。その情報が王都に届くまで一日かかりませんから」

情報だけならばすぐに届く。そしてその情報が入ればすぐにでも砦を強化できる――だからこそ、普段から多くの人員は割かない。

「まして今は、アルシザスとアヴィランテと友好関係を結んでいきます。ハウゼンランドに仕掛ければ南から挟まれ、勝ち目がないのが見えていますからね。しばらく戦争という心配はありませんよ」

レイの言葉を飲み込んで、リノルアースは「そうね」と小さく呟いた。

ハウゼンランドはもはや弱小国ではなないと言えるだろう。数年前までなら考えることも出来なかった話だ。

「……護衛もついています。アドル様も王子として踏み込むべきところと、踏み込まざるところは理解しているはずですから」

大丈夫ですよ、とレイは淡く微笑んだ。

「でも、レイじゃないもの」

リノルアースはむすっとした顔で紅茶を飲む。

「……はい？」

ルイが意味が分からないとでも言いたげに首を傾げる。今度は肘でわき腹を殴られた。

「実際ね、アドルを完全に制御できるのってレイだけだもの。護衛がレイじゃないっていう点でもものすごく不安。アドルってけっこう無謀だし」

その無謀さを、レイが補っていたんだけど。

二人でいるのが当たり前だった頃の話を、苛立たしげに呟くリノルアースにレイは苦笑するしかなかった。

「……もう騎士ではありませんから。婚約者という立場上、控えるしかありません」

「分かってるわよ！……分かってるわ」

はあ、と重いため息を吐き出しながらリノルアースは窓の向こうを見つめた。

「無茶しなきゃいいけど」

心配ならそう言えればいいじゃないですか、と殴られた腹をさすりながらルイが呟くが、幸いにしてリノルアースの耳には届いていないようだ。婚約者より兄の方が気にかかって仕方ないらしい。

「……いつそ俺が様子見に行きますか」

「ルイ。おまえももう以前と同じ立場じゃないことを理解しろ」

立ち上がって行動しかねない弟を制止ながらレイが呆れたように呟く。まさかアヴィランテの皇子を危険かもしれない場所へ行かせるわけにはいかない。

「………不自由ですね」

それは自分の状況に対する言葉なのか、ここにいる全ての人間に当てはまる言葉なのか——どちらでも当たりのような気がして、ルイの呟きにレイは黙るしかなかった。

8：今は、遠いなあ

はあ、と急いで移動しつため息を零す。

「殿下、それで二十一回目ですよ。ため息」

呆れたようにセオラスが言う。いちいち数えてたのか、と聞きたくなったがやめておいた。自分でもやりすぎなのは分かっていた。

「愛しい恋人のところを離れて、嫌々仕事へ行かなければならない男の気持ちがおまえには分かるか？」

「あーはいはい、分かりますとも。それじゃあ早く済ませますかねー」

聞き流すように答えるセオラスをじろりと睨みつける。

「当たり前だ！ ただでさえまともにレイに会えないのに距離まで出来るなんて最悪だ！ー」

「あーはいはい、ラブラブでいいことですなー」

急いで馬を走らせているというのに、セオラスの口調はのんびりとしたものだ。まるで小旅行にでも行くみたいに。

実際そんな簡単なことではないだろう、ということくらいは分かっているはずだ。ある意味その点気を使われているのかもしれない。下手に深刻に悩んでいる時間がなくなって良い。

空を見上げると、重たそうな雲が広がっている。

「――……一雨、きそうだな」

昼も夜もほとんど休まず――馬だけは気遣って、ただひたすらガ

デニア砦を目指していた。

「殿下、そろそろ休みましょう」

セオラスが真面目な顔で声をかけてくる。空を見上げると、雲はどこかへ消えて月が浮かんでいる。月は随分高い場所にいた。

「……そうだな、ここで身体を壊しても意味ない」

ため息を零して速度を緩める。野宿なのは覚悟の上だ。

「んじゃまあ火の準備しますかね。殿下、大丈夫ですか？ 毛布とか毛布とか毛布とかしかありませんけど、重ねりゃ少しは寝心地良くなりますよ」

「アホか。そこまで育ちのいい王子様じゃないから気にすんな」

甲斐甲斐しい侍従のような振る舞いを始めたセオラスに顔を顰めながらアドルバードは地面に腰を下ろす。もともと服が汚れようが気にするような性格じゃない。

「楽でいいですけどね。一応は王子様なんで気にしてみたんですよ」

「しつけが厳しかったからな。主に騎士からの」

「姐さんが厳しいのは誰にもですからねえ。騎士団ではそりやもうしごかれたしごかれた」

あはは、と笑いながらセオラスは慣れた様子で火をつける。

パチ、と火が爆ぜた。静かな夜に火の音はやけに響く。

「……慣れてるな。騎士団はそんなことまでするのか」

「まあ、一応は。いざつてときは最前線に出るのが仕事ですからね。ハウゼンランドは平和ですけど、騎士団だけは優秀って褒められるんすよ」

平和な国で優秀な騎士団を育てるのは難しいだろうに、とアドルバードは苦笑する。ディークのことを嫌でも思い出してしまうのは仕方ないんだろう。あのディークが妥協を許すわけがない。

「誇らしいよ。王族として」

きちんとした騎士団があり、そしてその騎士が王家に仕えてくれることは、やっぱり嬉しい。

「殿下にそう思っていただけなら本望つてもんです。……いいか

げん寝てください。数時間したら起こしますから」

「ああ、火の番、ちゃんと変わるからな。起こせよ」

まさかとは思うがセオラスに無理をさせるわけにもいかない。アドルバードは毛布にくるまって横になりながら念を押しておく。

「徹夜くらいどうってことないんですけどね。鍛え方が違いますから」

「起こせよ！」

さらに念を押して今度こそアドルバードは眠りに落ちた。

儼然と感じる月の光に、レイのことを思い出しながら。――夢を見るなら、彼女の夢がいいと思った。

何故か珍しく寝つけずに、レイは窓を開けた。

冷たい夜風が頬を撫でてさらに眠気を吹き飛ばしていく。心地よい風に目を閉じて、しばしの間無音を楽しんだ。

空には寂しげに月が浮かんでいる。

星は輝いているのに、どこか月とは距離を置いているように見えるのは、精神状態も関係しているのだろうか。

「……………」

アドルバード様、と呟きそうになって止めた。

声に出したら最後、自分の中の感情が溢れだしそうな気がする。

どこにいらんだろうか。まだ砦には到着していないだろう。野宿することになっているのは間違いない。

騎士の頃なら、傍にいたことが出来たのに。

これも間違いなく自分で選択した未来なのに、アドルバードの傍にすることが出来ない自分にやるせなさを感じている。

自分にとっての幸せは、彼の傍にいたことであって。

傍にいれば、この手で守ることが出来る。それだけで充分なのだ。こうして会うことも叶わないほど遠い空の下にいるくらいなら。

「……アドルバード様」

呟いて、本音を誤魔化す。

本当に言っではいけない言葉は、ここ数日いつも喉から出かかっていて。

月は高いところから徐々に徐々に地平へと近づいていく。

予定より少し遅れてセオラスと火の番が変わったアドルバードはただ黙りこんだまま空を見上げて呟いた。

隣にいるのが当たり前すぎたのは、どれほど前のことだろうなんて。

「——……今は、遠いなあ」

その呟きが、何のことなのかもアドルバードには分からない。ほとんど無意識に口にしていた。

目を閉じればすぐにでもレイの姿は思い浮かぶし、声は鮮明に蘇る。

夜明けは近かった。

またずつと走ることになるだろう。ガデア砦ももうそう遠くないところまで来ているはずだが。

一向に伝令とすれ違う気配はない。もしかしたら、という希望的観測ももちろんあった。ただの職務怠慢ならば楽なのに、と思うのはいけないことなのかもしれない。しかしこの静けさは何かがあったと言われているようなものだ。

砦のある方向を睨みつけて、アドルバードは拳を握る。

覚悟はしておくべきだ。これから起きるかもしれない事態を受け

入れるためにも。

9：君が何をするか、だよ

最近、城へやって来ても暇を持て余すようになってきた。

教わるべきことは多かつたはずだが――あまりにも急ぎ過ぎたのだろうか、半分近くの教師が「もう教えることはない」と文字通り卒業させられてしまったのである。もともと騎士として学んだものもあつたし、アドルバードに付き合つて授業を聞いていたこともあつたが、これは予想外だ。

長くなつた髪は、綺麗に結いあげることが出来るほどになった。ドレスの生活にも慣れたし、一通りの振る舞い出来る自信はある。しかしながら普段から忙しい生活に慣れていた分、何もすることのない時間をどうすればいいのか分からなかつた。

アドルバードがいるのなら、会いに行くという手段もあつただろう。人目につかないのであれば仕事を手伝うことも出来る。

しかし今はそのアドルバードが留守にしている。しかたない、と父のデークのもとへ行こうと城内を歩いていた。

「父上、レイです」

ノックをしながら声をかけると、聞きなれた低い声で「入れ」と答えられた。

「失礼します」

そう言いながら扉を開け、その先にいた思わぬ先客にレイは目を丸くした。

「陛下！？　どうなさつたんですか、こんなところで！」

それは紛れもなくこのハウゼンランドの王であり、アドルバードの父であつた。にこにこいつものように微笑みながら振り返る。

「やあ、久しぶりだね、レイ。そういう格好もやっぱりよく似合う。デイクの血がどこに流れてるのか不思議なくらいだよねえ」

のほほんとした口調で言いながら陛下は笑う。毎度思うがこの笑顔は真意が伺えない。アドルバードがいつも狸親父と言っているのがよく分かるくらいに。

「……お久しぶりです。陛下もこんな狭い場所にわざわざ足を運ばなくともいいでしょうに」

デイクの部屋は狭い。部屋の広さは充分にあるはずなのだが、整理すべき書類やらを無造作に置いてるので人がいるスペースが少ないのだ。騎士だった頃は定期的に片付けに来ていたのだが。

「陛下だなんて呼ばなくても。もうお義父さんって呼んでもいいんだよ」

あはは、と冗談をいいながら笑う国王にレイはなんと返せばいいのかわからなくなる。掴めない人だという印象は昔から変わっていない。

しかし、国王がこんな場所にいるということは。

「……ガデニア砦で、何か？」

頭の回転が速いということは利点なのか、どうなのか時折分からなくなる。

レイの質問に、国王はただ静かに笑った。その笑みが肯定だということとは、さすがのレイも分かる。

「……王の影からの情報だそうだ。ガデニア砦において騎士たちはほぼ全員動ける状態じゃないらしい」

「侵攻されましたか」

「いや」

レイの問いに、デイクは首を横に振った。そのことにわずかに安堵する。

「どうやら謀られたようですね。砦の武器を奪われたようなんだ。騎

士たちも命に別条はない。ただ身体に麻痺のような症状が出ている」

「伝染病ですか」

「どうだろうねえ。報告では症状が出るまえに商団が訪ねてきたそうだから、そいつらが怪しいかな」

商団、と呟いてからふと思う。もはや動くことのできない自分にどうしてそこまでの情報を与えるのだろう、と。

王の影の情報だと、父は言った。それはつまりアドルバードからの報告ではないということだ。アドルバードはまだこの情報を知らない。

「……陛下、私に何をさせたいんですか」

無駄に考えるよりも、聞いた方が早い。特にこの二人ならば。

国王はただ静かに、にっこりと、掴みどころのない笑みを浮かべる。

「何をさせたい、ではないな。君が何をするか、だよ。レイ」

ちらりと父を見ると、なんとも言えぬ表情で唇を固く引き結んでいる。どんな状況でも娘よりも主君を優先する様はなんとも潔い。

選択肢を与えているように見せかけて、その実与えられているのはたった一つの道だけだ。与えられた二択のうち、レイが片方を選ぶことはありえないのだから。

アドルを助けるか、助けないか。

そんな選択は、初めから答えが決まっている。それなのに目の前に立つ大人はあえてレイに選べと言っただ。

ふう、とため息を零す。

言いようのない腹立たしさをぶつけるほど子どもでもない。そしてこれはある意味でレイの為でもあるのだろう。いつまでもただ大人しくお勉強をしている——それはさすがに柄じゃない。

「——最近、城へ来ても暇なんです」

教わることが減ってしまって、とさも世間話でもするかのように

レイは呟く。

「あまり急いても良いこともありませんし、少しの間屋敷のことをしようと思ひまして。父上もあまり帰らず、ルイもあのとおりですから」

レイはそう父に笑いかける。

「そうだねえ、それがいいかもね」

につこりと笑いながら賛同する国王も、レイの意図していることは分かつているのだろう。

「それでは今日も用事は済ませましたし、これで失礼いたします。父上、書類はきちんと整理してください」

一礼しながらレイはそう言い、静かに部屋の扉を閉める。

バウアー家に、デイークが帰って来ることはほとんどない。使用人の口裏を合わせてしまえばレイが王都から出ても明るみになることはない。そもそもデイークも国王も見えて見ぬふりをするだろう。

レイはふう、と一息つく、と、足早にルイのもとへと向かった。

城内の別宮にあるのは賓客の為の部屋だ。

ルイは現在、ここで生活している。道中リノルアースの部屋を確認してもいなかったのだから、十中八九部屋にいるのだろう。

「ルイ」

返事も効かずに扉を開けると、目を丸くした弟が固まっていた。ソファに座ったりノルアースは優雅に紅茶を飲んでいた。

「ね、姉さん！？ どうしたんですか急に！」

「説明が面倒だ。服を貸せ」

結いあげた髪を乱暴に解きながらレイが言う。ルイは突然のことに動揺するばかりだ。

「レイ、それじゃあせつかく伸ばした髪が傷んじゃうわ。こっちへ来なさい。ルイ。早く目立たない服を準備して」

「え、あ、はい？ リノル様？」

「はやく、と言ったのが聞こえなかったのかしら？」

につこりと笑いつつも、その目が笑っていないリノルアースにルイは飛び跳ねて隣室へ消えていった。

まったく、とため息を吐き出しながらリノルアースはレイの髪を解く。

「……行くの？」

小さな問いに、レイはただ「はい」と答えた。

ああ、本当に。

この人はアドルのことになると真っ直ぐなのね。そんなことを思いながらリノルアースは目を閉じる。

「それでこそレイ、ね」

迷いのない返答にリノルアースはくすくすと笑う。

無理だ、叶わないと思いつつも——どこかで願っていたのかも
しれない。以前と同じ、二人のあり方を。

10：行つて参ります

ルイの服は、女性であるレイの身体には少し大きい。

濃い灰色の上着を着て髪を一つに結ったレイは、背の高さもあつて男に見えなくもない。ベルトに剣をさし、旅用のマントをかぶる。

「まったく、一応婚約中の身なんだってことは忘れないでくださいよ」

ルイがため息を零しながらレイに手早く用意した荷物を渡す。中には非常食と火打石やら、旅に必要な最低限のものを入れている。そういうところはやはり姐に甘い。

「忘れてないさ。その婚約者に会いに行くんだ。なかなかロマンのある話だと思わないか？」

レイはくすりと笑いながらそう言う。ルイはもはや何も言うまいと、ため息を零すだけにした。

「ええ、素敵な話だと思うわ」

無言のルイとは打って変わって、につこりと笑ってリノルアースが同意する。心なしかどこか嬉しそうにも見えた。

にこにこ笑ってレイを眺めつつ、急に「くっ」と唇を噛み締め、リノルアースは震えだした。

「ああ、でももったいないわ！ ルイの服じゃやっぱレイには地味よ！ そりゃあんまり目立つわけにもいかないから仕方ないけど、せつかくカッコいいのにー！！」

久しぶりのレイの男装に、リノルアースは少し——否、かなり不満そうだ。

「そんなこと言われてもですね……」

理不尽ですよ、とルイはため息を吐き出しながら呟く。レイが内密にガデニア砦に行く以上、あまり目立った行動をとるわけにも人

目につく服を着るわけにもいかない。少なくとも、王城を出るまでは。

「城の人間は騎士服か、最近のドレス姿しか知らないでしょうからちょうど良いでしょう。ドレス姿でやって来たのを門番も知ってますし」

あとはレイを迎えにいつも通り馬車がやって来て、誰も乗せずに帰ってくればいい。それで形だけはレイのアリバイが出来る。

「それで？ 馬はどうするつもり？」

「騎士団から一頭借りますよ。しばらくは目を瞑っててもらいましょう」

もともと文句を言わせるつもりはありませんが、ときっぱりと言うレイは男らしすぎる。

騎士団の馬はディークの管轄下だ。少しの間ならあるいは、というのはレイの甘い考えかもしれないが——おそらくは見えて見ぬふりをしてくれるだろう。

「そう、それじゃあ——気をつけて」

リノルアースは少しだけ心配そうにそう言って、背伸びをしてレイの頬にキスをする。それを目の前で見せつけられたルイは硬直するしかない。

「行って参ります」

レイも同じようにリノルアースの額にキスをして部屋を去っていった。

「——……なっ」

呆然としていたルイが部屋の扉が閉まってから口を開く。

「なんですかアレは！？」

そんな叫びが廊下まで聞こえた上にその後すぐに「うるさい！」とリノルアースが一喝した声まで他の人に聞かれていたことを、後日レイに聞かされたルイは頭を抱えた。

あまり人を会わないように城内を歩きながら、レイはガデニア砦までの道のりを頭に叩き込む。以前アドルバードの護衛として何度か行ったことがある分、考えることはそれほど多くない。

正門から出れば今朝会った門番と顔を合わせるかもしれない。

「騎士団が使う、裏の通用門から行くか」

ふう、とため息を吐き出しながら結論に至る。こうなるとことん騎士だった頃の習性やら考えが身に染みついてしまっているな、と笑う。

騎士団の厩舎に辿りついたレイは、ちょうど馬の世話をしていた団員と遭遇した。

「なんだ？ おまえどこかに行くのかその格好——って、ええええええええ！？ 姐さん！？」

騎士団の大半の奴らがレイを姐さん呼ばわりするのは騎士団に所属していた頃からの話だ。遭遇した団員も、レイの顔見知りだった。

「久しぶりだなギリアム」

「お久しぶりですっていうかなんですかその格好！？ お妃教育受けてるんじゃないんですか！？」

ギリアムの動揺っぷりにレイはまるで動じずに「急用だ」と呟く。「悪いが、馬を一頭借りたい」

一目でどこかへ行くことが分かる姿のレイに、ギリアムは口籠もった。

「え、でもその、姐さんはもう騎士団の人じゃあないじゃないですか。その格好からしてそこそこの遠出なんですよ？ さすがにバレたら俺叱られますよ」

「馬を借りたい」

レイは用件だけをきっぱりと言う。

「だから、その。ここで俺が頷いちゃうとマズイってことくらい姐

さんだつて知ってるじゃないですか。団長から説教される上にみっちり訓練ですよ？ 俺死にますって！」

「ギリアム、何度も言わせるな」

レイはにこりともせず、冷たい表情でギリアムに詰め寄る。

姐さんと団員に呼ばれているように――レイの实力は騎士団の間ならは知っている。

「え、ええー……勘弁してくださいよ、姐さん……」

そう言いながらギリアムは一步、また一步と後退る。

「見逃せないというのなら、ここですばらく眠ってもらっても構わないが？ そうすればおまえも少しは言い訳できるだろう」

レイが剣に触れた瞬間、ギリアムはついに降参と両手を上げた。

「分かりました、分かりましたよ！ 姐さんには負けます。帰ってきたらちゃんと援護してください」

どうぞ、と道を開いたギリアムにレイは微笑む。

「安心しろ。父上も黙認してる」

レイは葦毛の馬を選び、素早く跨った。銀の髪を隠すようにマントのフードを被る。

「そ、そういうことは早く言ってくださいよ――！」

馬上のレイにギリアムは恨めしそうに叫ぶが、レイは素知らぬ顔で馬の腹を蹴る。

「悪いな。急ぐんだ」

颯爽と駆けていったレイの後ろ姿を見送りながら、ぽつんと一人残されたギリアムは「……おつとこまえー……」と呟いて、はあとため息を零した。

11: 俺は、王子なんだから

——静かだった。

嵐の前の静けさにも似たそれは、嫌な空気を孕んで周囲に渦巻いていた。それを感じ取ったアドルバードは思わず立ち止まって砦を見上げる。古くからこの地にある砦は、年季こそ入っているものの、造りは強固なものだ。そう簡単に崩れることはない。

「殿下、俺が先に様子を見てきます。ここを動かんでください」

セオラスが剣の柄に手を伸ばしつつ、そう呟く。外に見張りがある様子もない。もしかしたら砦にいた兵士が全滅している可能性もある。それならば、まだ敵が潜んでいることもありえないはない。様々な可能性を考慮しつつ、アドルバードは頷いた。

本心ではすぐに様子を見に行きたい。しかし自分の立場を考えればそれは許されない。

「気をつけろよ」

ただそれだけ声をかけると。セオラスはひらひらと手を振つて余裕を見せる。その姿に苦笑しながら、手ごろな樹に背を預けた。

白い雲が凄く速さで空を駆けていく。頼に感じる風は冷たく、早くも冬を感じさせた。そういえばここは王都よりも北だったな、と思いつきながら目を閉じる。

レイが騎士だった頃なら、たぶん彼女は苦笑しながら自分の傍から離れなくてください、と言っただろう。そしてアドルバードの願いをひっそりと叶えてくれる。自らが動くことをアドルバードは惜しまない。けれど周囲はそれを押しとどめる。それを窮屈に感じていたが、レイは上手くバランスをとってくれた。セオラスの対応が悪いくらいというわけではなく、レイがアドルバードのことを考えてくれていた——考えていすぎたんだろう。

隣にあることが、心地よかった。
傍らにいたことが、誇りだった。

「……………レイ」

彼女に助けられていたことを、今さらながらに実感する。いや、実感ならもう何度もした。ふとした時に彼女が隣にいないだけで、まるで身体が半分に割られたみたいだ、なんて喩えは冗談でも使うものじゃないのだろう。半身と呼べる存在は他にもいるのだから。

「殿下」

砦の中から戻って来たセオラスが苦い顔で歩み寄ってくる。背筋を這う嫌な予感が、アドルバードの顔も曇らせた。

「中に動ける者はほとんどいません。幸いにして死者はいないようですが、大半が体調を崩して倒れています。意識のある者に話を聞いたところ、ちょうど連絡の途絶えた頃から麻痺や発熱などの症状が出始めた」と

「ならすぐに手当てを——」

と、そこまで口を開いてアドルバードは考えた。

馬鹿か、そういう話じゃない。

「……………とりあえず医師を呼び、これが感染の可能性のある病かどうかの確認。念のため安全が確認できるまでは砦は封鎖。近くの村人もこちらに近づけないように手配。俺達は原因の究明に動いたほうがいいだろう」

冷静に、自分に何度もそう言い聞かせながらアドルバードはセオラスに指示を出した。人手がいるな、と考えながらも自分が直接動けないことに苛立ってしまう。伝染病の可能性のある砦の中に——その患者に、自分が手当てをするわけにはいかないのだ。その病がどんなものかも分からないうちは、なおさら。

「俺は、王子なんだから」

ぼつりと呟きながら、拳を握りしめて自分に言い聞かせる。

「騎士団に応援を頼みます。医師は近くの村から呼びましょう」

セオラスはアドルバードの肩を叩き、苦笑しながらそう答える。

「気遣わせたか、とアドルバードも情けなく思いながら笑顔だけは作った。」

「……頼んだ」

任せてください、とこういう時にセオラスのように明るい人間が傍にいてくれると助かる。精神的な余裕のなさがこんなところで感じられた。

「それで、話が出るレベルの奴はどれほどいる？」

「一人二人つてとこです。……殿下、分かっているとは思いますが」
睨むようなセオラスの声に、アドルバードは降参するように両手を上げた。もちろんわきまえている。

「俺は近寄らない。話もしない。危険なことはいないから安心しろ」
「……頼みますよ？ 殿下に何かあったら俺が困ります。騎士団からも処分はあるわ、団長から殴られるわ、姐さんからも殴られるわで」

想像したのだろうか、セオラスが顔を青くする。ディークは教育という名目でやりそうだが、レイは果たしてするだろうか。それよりも危険に近づいたアドルバードを叱りつけそうなものだ。

「じゃあ俺は村へ戻ります。殿下は——」

「俺は残る。砦には入らないけど、周囲を少し探る。ここらへんの毒のある植物なりキノコなりを食べただけかもしれないしな」

「はは、とセオラスが笑いながらまた馬に跨る。」

「そうですね。病気だって決まったわけじゃないですから。じゃ、すぐに戻ります」

「ああ」

村まではほんの十分ほどだ。医師を呼んできたとしても一時間もしないで戻ってくるだろう。

アドルバードは静かな砦を見上げ、よし、と気合を入れる。何も
しないのは性に合わない。たとえ無駄となるかもしれない、周
囲を調べる。

さすが国境付近ともあって砦の近くは植物が多い。標高の高い分、
普通の森林では見られないようないろいろな植物が生えている。も
ちろん交易の為の道もある。平和なハウゼンランドの砦は旅人にと
つての駆け込み寺のような意味合いもあるし、山賊を取り締まるこ
とにも有利だ。

しかし砦の周囲を歩いてみても、怪しい植物はない。植物に詳し
いわけではないが、何度が野宿した際にレイに教わったりもしてい
る。

「……あれ？」

アドルバードは砦に戻ってから違和感に気づく。

砦の近くに――そして村へと続く道に、馬車の轍の跡があった。
最初は気づかなかったが、数日前のもののような。曇りの続いてい
るものの、雨はまだ降っていないから跡が残っていても不思議では
ない。

「それにしても随分と深いな……そんなに重いものを運んでたのか
？」

旅人ならば必要最低限のもの以外は持たない分、身軽になる。旅
人が安全な砦の近くを通ることはよくあることだが――。

「アドルバード様！」

思考に耽っていた頭が、停止した。

聞き間違うはずのない声だった。だけど、ここにはいるはずもな

い人だった。まさかと淡い期待を胸に顔を上げる。

「アドルバード様」

そこには、馬から降りて駆け寄る人の姿があった。長い銀の髪を一つに束ね、男物の服を着て、あちこち汚れて息を切らして、それでも美しいその人がいた。

「……………レイ？」

信じられない。幻を見ていると言われた方がまだ納得できる。だって彼女は王都に残っているはずだ。もう自分の騎士ではないのだから、王子の婚約者というしがらみの多い身なのだから、こんな地に来れるはずがないのだ。

それなのに。

「はい、アドル様」

微笑む彼女は、間違いなく愛しいその人だった。

12:とりあえずどうすりゃいいんすか？

「医師を連れてきてみりゃ……なんで姐さんまでいるんですかね？」
戻ってきたセオラスが呆れた顔でそう言う。連れてきた医師は助手と共に砦の中へと入っていった。

「セオラス、深く気にするな。アドル様、陛下から少し情報を頂いてきました」

「は？ 父上から？」

セオラスの言葉を軽く受け流したレイがアドルバードに向き合う。
アドルバードといえばまだ夢見心地でぼんやりしているが——そう長く物思いに耽っているのを、レイが許すはずもない。

「……再会の感激はあとで思う存分に表現してください。王の影からの情報です。砦の兵たちに異変が起きる前に、商団がここを訪れています。さらに砦内の武器弾薬を奪われていると」

「なっ……」

アドルバードは言葉を失った。

砦に常備している武器の量といったら、かなりのものだ。万が一の時はすぐにも応戦できるだけの準備をしてあるのだから。

「あくまで推測ですが、武器を盗むために毒を盛られた可能性があります。遅行性のものならばすぐに疑いがかからないと思っているのかもしれない」

レイの言葉に、アドルバードの中でひとつ違和感が消えた。

「轍の跡……！」

深いなと感じた轍の跡。あれが武器を運んだものなのだとすれば――。

「武器を奪われたのは事実だ。それにしても、そんなに大量の武器をどうするつもりだ？ 国内じゃ怪しまれて売りさばくことも出来ないだろう」

「そうっすね……」

セオラスとアドルバードが頭を抱える。レイは荷物の中から地図を取り出して、その場に広げた。大陸の北半分を描いたものだ。

「レイ？」

「いいですか」

レイがす、と地図の一点を指差す。

ガデニア砦の付近だ。

「ガデニアは確かにハウゼンランドの国境です。しかし注目すべき点はそこじゃない」

レイの指が地図の右へ——東へと動く。

ガデニアの東にあるのはハウゼンランドより遙かに小さな国の集まり。そしてその先にはあるのは広大な荒野とシン帝国。

「まさかシンが？」

「馬鹿ですか。シン帝国ほどの国がハウゼンランドから武器を奪つてどうなります。あちらの方がよっぽど性能の良い武器を持つてますよ」

東、と言われてついすぐに大国に思考が繋がったアドルバードを、レイがたった一言で一喝する。

「ああ、もしかして争い絶えない小国へ売りさばくつもりなんですかね？」

セオラスが合点して答えを言う。

レイが静かに頷いて、地図を見つめた。

「東の小国は常に戦争状態です。最近まとまりが出てきたとの噂がありました。それもどれほど信用できるものなのか分かりませんが、まだ戦争が終結していないのかもしれないし、もしかすれば、新たに小国をまとめ上げた統治者へ反旗を翻した者がいるのかもしれない。どちらにせよ、多くの武器を必要としているのは確かです」

「そういうところで商売する奴らもいる、と」

「ええ」

アドルバードが納得すると、レイは地図を丸めてしまった。

「じゃ、とりあえずどうすりゃいいんですか？」

セオラスが気楽にそう質問する。――アドルバードに。

「もちろん今すぐ追っかけてとっ捕まえて武器を取り返す」

アドルバードは至極当然のことにように言い放った。単純すぎる解答に、レイが頭を抱えているとも知らずに。

「アドル様。追うのも、捕まえるのも分かります。ですが、騎士団の増援を頼んで、指示を出す人間がいなくてどうするんですか」
「う」

「殿下は相変わらずですねー。ある意味ほっとします」

セオラスが軽快に笑うのでアドルバードはむかついて肘で小突いておいた。

「ですが見失うわけには行きませんね。とりあえず私が先に……」

「あーはいはい、俺が行きます。俺じゃ殿下の手綱は上手くさばけないんで」

レイが自ら商団を追うと言いかけたところで、セオラスが手を上げた。

「目印はいつものとおりに。騎士団のやり方は覚えてるでしょう？ 増援が来て指示を出したら追って来てください」

「轍の跡を追えるのも限界がある。場所に検討は？」

レイがセオラスに問うと、にかつと笑って答えた。

「奴らの目的が東に売りさばくことなら、ここらへんにいるってものでしょ？ 普通はこの砦を通るけど、通るわけにはいかない。なら別ルートってことですもんね。山を越えるつもりはないでしょうから、隣の森をこーっそりと行くつもりでしょう」

模範解答にレイは満足して頷いた。

「そこまで分かっていれば問題ない、か。それで、増援に頼んだのは――」

「一番近くのフェルデンの奴らだろ？」

レイの問いに、アドルバードがセオラスよりも先に答えた。フェルデンはガデニア砦に一番近い駐屯所の名前だ。

「……なら、大丈夫でしょう」

「？ 何が？」

思案げなレイに、アドルバードが首を傾げた。

「私はあくまでバウアー家にいることになっているので。曲がりなりに『王子の婚約者』がこんなところにいていいわけがないでしょう？」

苦笑気味にレイがそう言っただけで、レイ・バウアーがここにしていることがそこその問題だということに気づいた。立場だけで考えれば、王子の婚約者が危険とも思われる場所へ単身向かったということになるのだ。お偉い貴族の婦人方が知れば卒倒しかねない。

「ですがまあ、フェルデンの人間ならば以前より懇意にしておりますし。『レイ・バウアー』に似た人、と勘違いしてもらうことにします」

つまりは見ても見ぬふりをしてくれ、ということか。

アドルバードは苦笑しつつもレイの言葉に同意しておいた。フェルデンはガデニア砦に行く途中や帰りによく立ち寄っていた場所だし、アドルバードにもレイにも顔見知りが多い。問題はないだろう。否、あったところで、それをどうにかするのは自分の役目だ。

「こういうの久しぶりで、なんか懐かしいな」

レイの男装……というのはもちろんだが、こうして城以外の場所で会うというのかなり久々だ。そしてこんな面倒事に巻き込まれるのも。

「そうですね、なんだかんだで以前の方が一緒にいましたから」

素直に同意するレイが可愛いなあ、なんて思いつつ顔がにやけるのは仕方ない。別れの時にちゃんと充電したつもりだったが、やっぱり足りなかったみたいだ。

「あー……えーと……仕事してくださいね？ 主に殿下」

「……」

その場にセオラスがいたことを忘れ、世界を作るところだった。いや半分くらい出来かけていた。

「だ、誰に言っただけ……いいから早くおまえは追えよ！」

「いや、行つてきますと言おうにもタイミングが、ですね。医師の診察も終わるでしょうし、後は頼みます姐さん」

「なんでレイに頼んでく!?!」

ここの最高責任者は誰だというかこのままだとアドルバードの立場がない。

「アドル様では職務を忘れる可能性があるからじゃないですか?」

「誰のせいだと思つ……つてそれはどうでもいい!」

危つく色々本音を吐き出しかけてどうにか正気に戻る。こうなると普通にレイと一緒に公務をこなしていた昔の自分を尊敬せざるを得ない。

「……んじゃまあ、行つてきます。いちやつくのもほどほどにしてください」

「つつつつるさい!」

照れ隠しのようなアドルバードの叫びは、むなしくその場に響くだけだった。

13：俺はそんな『正しい』為政者になりたくない

改めて、レイは有能だった。

「お医者様の診断で感染症の類いではないと分かった。二名ほどお医者様の手伝いとして看病を、さらにここには十名残り、倒れている者に代わり砦の警固にあたれ」

そのときぱきとした指示に、フェルデンの者は素直に返事をしていった。本来指示を出すべき王子に目もくれず。有能すぎるくらいだ。「いやあ、まさかレイさんがいるとは思いませんでした！ 殿下のご婚約者になったという話だったので、もうお会いすることはないだろうと」

「本当です！ 直接お祝いを言えて嬉しい限りです」

交流のある頃から、レイはフェルデンの騎士に慕われていた。会えるとは思わないところでの遭遇に、騎士たちは皆は浮足だっている。

「静粛に。残りは我々と共に商団を追う。先んじてセオラスが追っているはずだ。急ぐぞ」

「はい！」

返事すらも威勢がいい。アドルバードは呆れつつも適確に指示を出すレイに拍手を送っていた。レイみたいな男がいたら、俺も将来安心できるんだけどな、なんて思いながら。

「残ってるのは五人くらいか。んじゃあ追っかけるか」

ひととおりの指示が終わったのを見てアドルバードが声をかける。浮かれた空気も仕事となれば切り替わるのが騎士団のいいところだ。「え……あの、殿下も行かれるんですか？ 危険ですし砦に残っていても……」

フェルデンの騎士の一人がおずおずと手をあげて話す。本来の『王子』ならば残っている方が正解なのかもしれないが――。

「危険なところへおまえたちを行かせて自分は安全な場所にいらつて？ 冗談じゃない。それが為政者としての正しい答えだとしても、俺はそんな『正しい』為政者になりたくないね」

アドルバードは言いながら腰の剣に触れる。苦笑まじりの笑みが浮かぶ。

「それに、心配されるほど俺は弱くない。なんてったって俺の師匠はあのデイク・バウアーだから」

「……だ、そうです。各自自分の仕事をするように。殿下の護衛は必要ありません」

レイがくすくすと笑いながらそう付け加える。その言葉の裏にある意思を感じて、アドルバードはレイの腕を引いた。

「おまえも分かっているんだろうな。前みたいに身をもって俺を守る必要はないんだから」

もう主従の関係じゃない。そう思うからこそ釘を刺したのだが――
|。

「無理な話ですね。レイ・バウアーはアドルバード様の婚約者であると同時に、剣の誓いをたてた騎士ですから」

それは決して揺るがない。レイの瞳はそう告げていた。守り守られるという誓いは、何があっても崩れることはない。

「レイ……」

頑なな恋人にかすかな苛立ちを感じたのは事実だ。もし自分の身を守ろうとしてレイが傷つくようなことがあれば――以前のように耐えることはできない。歯止めに使っていた『関係』は変わったのだから。

「ですが、今ここに『レイ・バウアー』はいませんから」

謎かけでもするかのように、レイは悪戯げに笑う。

「屋敷にいるはずの『レイ・バウアー』が怪我なんてしていたら可笑しいですからね。もちろん私も気をつけますよ」

だから心配しないでください、とでも言いたげに笑うレイに、してやられた気分になりながらアドルバードは頷く。

周囲の騎士たちがようやく報われた殿下の恋の行方にこっそりと涙を流しているのにも気づかず。

——城に帰ったらレイにドレスを贈ろう。それに合わせた装飾品も。ああそうだ、新しいドレスを作るって言ってた。どんなドレスだろう。どんなドレスだつてきつと綺麗だ。そしてウィルザードとシェリスネイア姫の結婚式に行つて。次にあるのはリノルとルイのか。そう考えると自分たちの結婚式は遠い。

「……随分と無口ですね。もう疲れましたか？」

馬でセオラスのつけた印のあとを追っていると、レイが声をかけてきた。

「いや全然。なんていうか面倒なことに巻き込まれてるから、これからの楽しいことを考えてた」

「楽しいことですか？」

レイは少しも疲れていない顔で笑う。

「そう。おまえがドレス作るって言ってたな、とか。ウィルたちの結婚式とか」

「ああ、そんな面倒なこともありましたね。お二人の結婚式は楽しみですが」

ため息を吐きながらレイが答える。

「ドレスを作るのは面倒事かあ」

レイらしいや、とアドルバードは笑う。

「最近はそんなことばかりでしたから。こうして暴られる方が楽しいですよ」

馬で早く駆けながら楽しそうにレイは話す。お妃修行の日々は思った以上にストレスが溜まっていたらしい。

「随分と気楽そうですね、お二人とも。一応問題の商団を追ってるんでしょう？」

暢気に会話していたアドルバードとレイを見てフェルデンの騎士が声をかける。商団を装った武装組織である可能性が高いので、待っているのは間違いなく血生臭いもののはずだ。

「お貴族仕事も面倒だってことだ。……止まれ」

レイの一言で全員がぴたりと止まる。大きな木にそれとなく分かる目印がひとつ。

「セオラス」

あまり大きな声で名を呼ぶと、影に隠れていた一人の男が姿を現した。馬は少し遠くに繋いでいるのだろう。

「ども」

へらつと笑いながら手をあげたセオラスに合わせてレイも馬を下りる。すぐ動くことになるので他はそのままだ。

「首尾は」

「まかせてください。向こうで休んです。ここからどうやって移動しようか悩んでるみたいですね。五人ほどこいけません。全員武器を持ってます」

「大体予想通りか」

ふう、とレイがため息を吐く。

「五人くらいなら俺とレイ、それとセオラスで先に行こう。フェルデンの奴らはその後で来てくれ。拘束するのには人手がいる」

レイとセオラスの話を聞いていたアドルバードがあつさりと指示を出した。それに驚いたのはフェルデンの人間くらいだ。

「で、殿下！ それなら全員で突撃した方が――」

「大人数で動く方が隙が生まれやすい。ましてこの森の中だしな。おまえらは周囲を囲んでくれる方が助かる。もし俺たちが取り逃がした奴がいたらおまえらで捕まえてくれ」

さほど深い森ではないが、あちこちに木々が茂っているこの場所は団体行動には向かない。大人数での乱闘になれば下手すると共倒

れしかない。

「そうですね。五人程度ならそれで充分すぎるくらいです」

レイも初めからそのつもりだったかのようについに頷き、セオラスについては異論は一つもないようだった。

「姐さんと俺が二人、殿下が一人つてとこですかね。楽勝楽勝」

勝手にそう見積もるセオラスにアドルバードは少しむっとしながら馬を下りる。

「俺とレイが二人、おまえが一人、だ！」

「無理しなくていいですよ殿下」

「無理なんかしてない！」

一方的な言い争いにレイがため息を吐き出して、無視を決める。
フェルデンの騎士たちを振り返った。

「これから十分後に作戦開始。それまで周囲を囲んで待機しててくれ」

そう指示を出すと言い争う二人と無視してすたすたと歩き始めた。
このままでは一人で行きかけてしまいかねない姿に二人が慌てて後を追ったのは言うまでもない。

14：正義の味方ってとこじゃないんすかね！

「国の騎士団なんていつでも大したことねえのなあ！ あっさり騙されやがって、今頃はあいつら全員ぶっ倒れてんじゃねえの！」

酒を飲み交わしながら、ぎやはは、と下品な笑い声をあげる連中にアドルバードは苛立った。きつく拳を握りしめたアドルバードを、レイが無言で制する。

「先走らないでくださいね。合図して出ます」

冷静なレイの声に、アドルバードは怒りを飲み込んで頷く。酒を大量に飲んだ連中はどこからどう見ても隙だらけだ。

息を殺して身を隠し、レイが小さく「3、2、1」と数える。カウントがゼロになった瞬間、三人は飛び出した。

「なんだあ！」

驚いて声をあげた男を一人、まずアドルバードが斬り伏せた。

「人のもん盗って金儲けとはいいい度胸してるなあ！ 一つ残らず返してもらっぞ！」

血がついたままの剣を突き付けると、男達は一瞬怯んだ。しかし酒の魔力が、すぐに威勢よく大声をあげてかかってきた。

「これでは運動不足解消にもなりませんね」

運動不足なんて感じさせないしなやかな動きでレイが一人、あははと笑いながらセオラスが一人、と斬り伏せる。

「なんだこいつら！」

「正義の味方ってとこじゃないんすかね！」

また一人セオラスが斬るが——浅かったのだろうか、一太刀では倒れない。背後にいたアドルバードが止めを刺し、その間にレイが

もう一人を倒していた。

それは本当に数分で終わってしまった。

「口ほどにもない」

ふん、とアドルバードが剣を軽く払い鞘にしまう。

もう終わったのかという顔でフェルデンの騎士がやって来て、地に伏してる男達を縛り上げた。

「まだ気は失ってないだろう。手当ての後に聴取を。向こうの馬車の中を見て皆から奪われた武器と数が合ってるか確認しろ」

「はい！」

レイの指示に何の疑問も持たずに騎士たちは働く。本来指示を出すべきなのはアドルバードのだが、本人も最早何も言わなかった。レイが騎士として働いていた頃はこうだった、なんて思いながら苦笑するだけだ。

「俺が二人、だったろ！ 無理じゃなかったじゃないか」

じろりとセオラスを睨みながらアドルバードが言うと、セオラスは笑った。

「あれで二人とカウントするのはずるくないですか？ 公平に一人半ずつですよ。俺が先に斬ってるんだし」

「止めを刺したのは俺だろ」

またごちゃごちゃと言い争いを始めた二人に、レイが呆れてため息を吐き出し、割って入るようにして無駄な会話を止めた。

フェルデンの騎士は既に縄で縛りあげた男達を運び始めていて、周囲に残ってるのはアドルバード達三人くらいだった。アドルバードとセオラスも一瞬目を合わせた後で笑い、皆に戻るために歩き始めた。

静まり返っていた皆は一転して、賑やかになっていた。

医師の指示が飛び交い、フェルデンの騎士があちこちと駆けまわっている。アドルバード達はいえは大仕事を終えて暇な方だった。「まったく、気が緩んでるなあガデニアの奴らも。こんなアホどもにしてやられるとは」

はあ、とため息をつきながらまた稽古し直す必要があるだろうか、なんて思う。ハウゼンランドが平和なおかげで緊張感に欠けるということは否めない。

「武器をこのまま売られてしまえば東側の情勢の悪化に繋がるでしょうし、国境も危くなるかもしれませんでした。不覚をとったという点に関しては罰が必要でしょう」

一度奪われた武器がどこへ売られるはずだったのかはこれから話を聞きだして分かることだが、予測はほぼ間違いないだろう。東の荒野の情報が入りにくいのも面倒なところだ。

「私としても数日滞在して、騎士の根性を叩き直したいところですが」

ぽつりとレイが呟くと、セオラスが少しだけ青ざめた。

「生憎、そう長居するわけにもいきません。騎士団から無断で馬を拝借してきてますし、王子とその婚約者が長いこと王都を留守にするわけにもいかないでしょう」

はあ、とため息を吐き出して残念そうにレイは続けた。命拾いしたな、とセオラスは小さく呟いた。病み上がりの身体でレイにしかれるのは地獄だろう。

「……て、ことはすぐ帰るのか？ さすがに少し休んで行けば……」
さつき来たばかりじゃないか、とアドルバードがレイを一瞥しながら言った。かなり無理してここまで来たのだから、一晩くらい休んでも罰は当たらないと思う。

「それもそうですが……さすがに無関係の人間がこれ以上皆にいるのも問題でしょう？ 近くの村まで戻って宿をとりますから」

「ここまできたら他の奴らだって見て見ぬふりするだろ。まるで無関係というわけでもないし」

村に着く頃には日も暮れてしまう。旅行者も少ない時期だから宿をとるのは可能だろうが――。

「そこを甘えるわけには――」

「はいはい姐さん。殿下はまだしばらく逢瀬を楽しみたいんですよ。城じゃロクに話も出来ないんだから」

止まらない二人の会話にセオラスが割り込んだ。

「明日には俺たちも引きあげると思いますし、途中まで一緒に帰りましょ」

ね、と話をまとめ始めたセオラスに、レイも呆れ顔でため息を吐く。降参の合図だった。

城の中と違い、この状況はレイとしても居心地がいい。緊張続きだった最近はこうして楽に息をすることも忘れていた気がする。ならばしばしの休息、というのも悪くはないだろう。

「まあ、陛下も父もそのつもりなんでしょうからね」

王子を守る護衛が増えるのは良いことだろう。

「ではアドル様」

「？ うん？」

につこりと笑いながら振り返った恋人に、少し嫌な予感を感じながらアドルバードは答えた。

「帰るまでに報告書をまとめてくださいね？ 帰ってからやるから仕事が片付かないんですから」

本当に、相変わらず。

レイは有能だ。

「……………はい」

15：俺はレイの人生も背負うことになるんだよ

捕えた連中が語ったのはおおそちらが考えていたとおりのことだった。東の荒野での小国の情勢は常に不安定で、現在も一人有力なものが部族をまとめ国をなそうとしているそうなのだが、それに反対する勢力ももちろんいるものだ。その反対勢力に大量の武器弾薬を売ればひと儲けできる。——そして目をつけられたのが平和なハウゼンランド。

まったく迷惑な話である。

「アドル様、そこ文字間違えてますよ」

報告書を作っていると、隣で見ていたレイがぴしゃりと間違いを指摘する。手元を見れば確かにスペルを間違えていた。

「……いや、なんだか気が抜けたらどつと疲れが出て」

眠い目をこすりながら言い訳し、目を覚まそうと頬を叩いた。「もうすぐで終わりでしょう。これを書いてしまえばあとは楽なんですから」

「ん、分かってる。でもまあ、ご褒美があると思えばもう少し頑張るんだけど。俺書類書くの嫌いだしなあ」

ふあ、欠伸をしながら呟くと、レイは少し冷めた目でアドルバードを見ていた。

え、俺何か変なこと言いました？ アドルバードは顔をひきつけて、自分の発言を思いかえす。問題があるとすれば——。

「別にいつもいご褒美にキスして欲しいなんて思っていないぞ！？ そんなんじゃないなくてもやる気のでそうなことがあればいいなあっていう話で！」

「……本来いるはずのない恋人が隣にいますから、充分なご褒美だと思いませんか？」

呆れたようにため息を吐くレイに、アドルバードは小さくなるばかりだ。

「そう言われるとそのとおりなだけども……でも俺、今回ののはレイへの褒美だと思うな」

途中で止まっていた報告書の書きながら、アドルバードは呟いた。レイは予想外の言葉に目を丸くしている。珍しい反応だなとアドルバードは内心でおかしくなった。

「そう、ですか？」

「うん。そりゃまあ俺としても仕事はさくさく進むし会いたかったし嬉しいけど……レイはこうでもしない限り、王都の外になんて出ないだろうし。今は周りがうるさい時期だから剣を握るのも我慢してたたる？ 親父はおまえやリノルには甘いからさ。気分転換させなかったんじゃないか？」

それを止めなかったディークも同じようなことを考えていたんだろう。アドルバードは素直にそう思った。

「では……私がこうしてアドル様を急かして報告書を書かせているのも、陛下の予想通りなんでしょうか？」

くす、と笑いながらレイは問う。

半分以上が埋まった報告書を前に、アドルバードは苦々しそうに答えた。

「まさにそうだろ。ホント食えないおっさんだ」

手のひらの上で転がされているような気がしてあまり良い気分ではないが、それでも何かおかしくて、アドルバードとレイは目を合わせると笑った。

行きは急いだものの、帰りはそれほど急かされているわけではない。三人でそこその速度を保ちながら王都を目指した。旅に慣れた者しかいない帰り道はこれといった問題もなく、予定よりも幾分か早く城が見えた。

「では私はここで。裏の通用門から入りますから」

城へ入ろうかというところでレイがそう言いだした。そういえばアドルバードと一緒にいるはずがない——と、いうことになっているのだった。

「ああ、じゃあまた」

「今日私は城へ来ていないはずですから、明日以降になりますね」
くすくすと、アドルバードを焦らすようにレイは呟いて去って行った。もう正門は目の前で、アドルバードとセオラスはそのまま門をくぐった。

「……姐さん、幸せそうですね」

馬を預けたところで、セオラスがぼつりと呟いた。

「な、なんだよ突然」

しみじみとしたセオラスの言葉に、アドルバードは反応に困って口籠もった。

「いえ、ああいう風に笑う姐さん、あんまり見たことないんで。騎士団では厳しくておっかない感じでしたしね」

確かに以前はあまり笑わなかったかもしれない。騎士としての矜持があつたのだろう。ましてレイは規律に厳しい。

「幸せそうで良かったです。騎士団の奴らは姐さんに懐いてますからね。泣かせたらぶん殴られますよ」

「おまえらが俺を殴ったらレイがおまえらをしばらくと思うぞ」

自惚れではなく、それは確実に。アドルバードは苦笑いしながらそう言い切った。セオラスも「でしょうね」と笑う。

「……窮屈さからもそろそろ解放されるだろうし、これからは本格的に結婚まで忙しくなりそうだなあ」

お妃修行という名目の授業もほとんど終わったと聞いた。アドルバードが忙しいのはいつものことだが、レイはしばし暇になるだろう。

「先にお姫様の方でしょう？」

「ああ、そうだ。リノルのがあつたかあ。あつちは一応国同士の体面があるからさっさと済ませたいだろうしなあ」

本音を言えばアドルバードも早く結婚したい。『婚約者』という立場である間はレイが剣を握るたびに周囲はうるさく騒ぐだろう。それを理由に婚約を破棄させようとするかもしれない。

それが分かっているから、レイは剣を握らずに耐えていた。

アドルバードには、その姿を見ている方が辛い。

「殿下。ここ、皺寄ってますよ」

セオラスが自分の眉間を指差しながら苦笑した。指摘されたアドルバードは直そうとするが、なかなかうまくいかない。

「癖になるかも。最近いろいろあるし」

さすがに眉間に皺が寄ったままいかつい表情になるのはごめんだ。自分の指でぐいぐいと皺を伸ばしてみる。

「姐さんという時はしまりのない顔をしてるんですけどねえ」

「……しまりないと言うな」

むす、とした顔でアドルバードが呟くと、セオラスは可笑しそうに笑う。

ふわりと風が吹いた。王都の風は、ガデニア砦の風と比べると温かい。そういえば今は春だったなあ、と思う。ハウゼンランドでは春だと感じた頃には短い夏がやってくる。そして気がつけばまた寒い冬になるのだ。

「あんまり気にすることないですよ。姐さんが選んだ道ですから。殿下が背負うことじゃありません」

「これから俺はレイの人生も背負うことになるんだよ」

だから悩む権利はある、というのは勝手だろうか。

「でもやっぱり気にすることじゃありませんよ。言っただでしょう？」

晩春の風がまた二人の間を吹き抜ける。見上げれば空の色は徐々に濃くなっているようだ。夏が近いのだろう。

アドルバードは空を見上げてセオラスの言葉を待った。

「幸せそうだ、って」

16：自分の選んだ道……か

通用門を通り、厩へ顔を出すと誰もいなかった。表の門から王子が帰還したので、迎えに行っているのか——馬泥棒の犯人を見逃す為にわざと手薄にしているのか。

「よく頑張ったな」

馬の首を撫でて労い、水と干し草を与えてから厩を出る。その時だった。

「レイ!!」

よく通る、可憐な声が聞こえて、振り返る。金の髪が風に踊り、白い肌は走っているせいかなんの上気している。

「おかえりなさい!」

嬉しそうな声は、すぐに飛び込んできた。レイはその身体をなんとなく抱きとめる。

「ただいま戻りました、リノルアース様」

レイがそう返すと、リノルアースはレイの首に抱きついたまま微笑む。

「アドルが戻ったって聞いたから、レイもそうだと思った! こっちに来て正解ね!」

兄の迎えよりもこちらを優先した事実を聞かされると、婚約者という身もあつて居たたまれない。

「リ、リノル様!」

慌てた様子でレイが駆けつけてきて——まるで恋人同士のように抱き合う二人の姿に絶句した。

「あら、遅かったじゃないの、レイ。もう感動の再会は済ませたとこよ」

「え、あ、あの」

ぽかんと情けない顔のまま、何と言ったらいいいのか分からずにルイは目を丸くする。弟の頼りない姿に、レイはため息を零した。

「ルイ。いくらもう騎士ではないからといって、リノル様から目を離すのは感心しない。ましてこんな場所に姫君が足を運ぶなんて」

「もう、レイったら口うるさい女官長みたいなこと言っただから」

ぷう、と頬を膨らませてリノルアースはそう零した。

「す、すみません……ですが、無理があります。リノル様を止められる人間はそういません」

「ちょっとルイ。可愛い可愛い婚約者に対してなんなの、それ」

じろり、とリノルアースから睨まれてルイは一步後退った。リノルアースはむすつとしたままレイから離れる。

「とにかく。レイはすぐにお風呂。綺麗に磨いてまた『王子の婚約者』に戻らないとね。その間に迎えの馬車を呼ぶわ」

男物の服を着て、馬と駆けたレイはお世辞にも貴族の令嬢には見えない。レイは苦笑して頷き「お願いします」と答える。

リノルアースは意気揚々と城の中へと戻る。その後ろ姿を見ながら、ルイがレイに微笑んだ。

「遅くなりましたが、ご無事でなによりです。アドル様は一足先に城に入って、陛下に報告されてますよ」

「知ってる。ともあれ、迎えの馬車が来るまで私は城にいないことになったいるんだから、会うわけにもいかないだろう」

表向きはレイはバウアー家にいたことになっているのだから。レイは苦笑すると、疲れを感じさせない動きですたすたと歩いて行く。

「何してるの、ルイ！ 早く……！」

急かすリノルアースの声に、ルイは苦笑しながら二人を追いかけた。

薔薇の香りのする湯に浸かりながら、レイは筋肉をほぐした。しばし剣を振るっていなかったからか、やはり少し動きがにぶっていた。自分以外は気づかない程度だが。

長くなった銀の髪は汚れも落ち、いつもの輝きを取り戻している。何もかもが夢だったように。

本当に、夢のように儚い、以前の日常だった。

「これも、自分の選んだ道……か」

苦笑しながら天井を見上げる。普段リノルアースが使う浴室だけあって広くて美しい。何度か使ったことはあるから、今さら感慨深くもないが、いずれ自分が彼女と並ぶ——彼女以上の生活をするのかと思うと、不思議で仕方ない。

見下ろす自分の肌は、およそ淑女の白い肌とは違い、あちこちに傷が残っている。騎士だった頃のものだ。

「……………」

本来ならば、肌に傷一つない姫君が王妃となるのだろう。

騎士であつたことを恥と思つたことはないし、この傷跡のどれもがレイにとっては誇りだ。アドルバードの為、国の為に身体を張つた結果なのだから。

だから、後悔はしない。

「レイー！」

物思いに耽つてしていると、扉からひよっこりとリノルアースが顔を出す。

「そろそろいいんじゃない？ 着替えの準備もできたわよ」

「…………どのくらい入ってました？」

リノルアースに急かされるほどとは、とレイは苦笑した。騎士の

頃の癖でいつもは早すぎるくらいに上がっているのだが。

「一時間と少し？　くらいかしら。珍しく長かったわね」

「少し考え事をしていたせいでしょうか」

らしくないな、と苦笑しながらレイは湯船から上がる。待ち構えていたように侍女がタオルを持ってきて、レイの肌を隠した。ふわふわとしたタオルはひどく優しい。

「それこそ珍しいわ。レイが考え込んで時間を忘れるなんて」

くすくすと笑いながら、リノルアースは侍女にされるがままのレイを傍観した。侍女たちはレイの髪の毛の水気を取り、身体を拭き、衣装を着せていく。いつもならば自分で出来ると断るレイだが、最近是我慢するようにしていた。王妃にとっては当たり前前の日常だからだ。

着せられるのは騎士服ではない、美しいドレスだ。

化粧台の前に座らされると、銀の髪は複雑に結いあげられ、薄い化粧を施される。

「ん、よろしい！　レイは綺麗だからあんまりお化粧いらないわね」
全てが終わると、リノルアースは満足そうに笑った。

足首まであるドレスは、海の深い青だ。一色ではなく、本物の海のように様々な青がグラデーションのようになっている。髪には同じ生地のリボンが編み込まれた。

「さっきレイの家から馬車も来たらしいわ。これで城内を歩き回っても矛盾はないわね」

につこりとリノルアースが笑って情報を伝えてくる。その時コンコン、と控え目なノックが聞こえ、リノルアースは「どうぞ」と答える。

ルイがおずおずと気まずそうに顔を出した。

「……着替えは、終わりました？」

「ええ、ばっちりよ」

リノルアースが頷くと、ルイはほっとしたように部屋に入ってきた。リノルアースに追い出されていたのだらう。

「アドル様も報告も済んで、今は部屋にいらっしゃるそうです。行って見たらどうですか？」

変身した姉に特に感想もなく、ルイはそう告げる。

「……いや……」

今行っても溜まっていた仕事の邪魔——アドルバードがレイに夢中になって仕事が手つかずになるだけだが——になるだろう。

「いいから、行って来なさい。どうせデイクのところにも行くつもりだったんでしょ」

ほら、と背中を押され、レイは困ったように微笑む。このままではどうせ追い出されるな、とレイは大人しく頷いた。そもそも弟の邪魔をするのは忍びない。

「では、失礼します」

優雅にドレスを裾を摘んで一礼すると、レイは踵を返した。

17：それに上回る幸福があると

どちらに先に行くべきか——しばし考えて、レイは結局ディークの執務室へと向かった。

「入ります。父上？」

軽くノックをした後、返事を聞かずに扉を開ける。

「ああ、戻ったか」

開けるとすぐに父の顔があり、そして――

「レイ！」

ぱつと顔を輝かせるアドルバードの姿があった。

「アドル様？ 部屋にいらつしやると聞きましたが」

「ああ、一度部屋に戻ったんだけど、なんか落ち着かなくてさ」

最近ずっと忙しかったせいかな、とアドルバードは苦笑した。さすがに国王陛下も旅から戻った息子に鞭打つことはしなかったらしい。今日一日休んでいっても言われたんだろう。

「きちんと休んでください。公務だつて残っているんでしょう？」

休むことも仕事の一つですよ」

「わかつてるよ、心配するなつて」

レイの小言に苦笑しながら、アドルバードは紅茶を飲む。湯気があまりたつていないところから、そこそこの時間ここにいることが分かる。

「……アドル様」

眉を顰めてさらに追撃しようとする、アドルバードは両手を上げて降参した。

「ちゃんと今日はこの後休む。約束します」

レイはその姿を見てとりあえず納得することにした。アドルバードと父から冷めた紅茶を取り合げて、また新しく淹れ直す。どうぞ、

と差し出してレイも座る。一瞬迷ったものの、アドルバードに無言で主張されたのでアドルバードの隣に座ることにした。

「ガデニア砦では——予想通りではありませんでしたが、気になりますな」
ふう、と重いため息を吐きディークが呟いた。

「ああ、東の動きに気をつけていた方がいいな」

苦い表情で呟くアドルバードに、誰もが頷くしなかった。新興国と、それに反発する集団。動きがあればそれはハウゼンランドにも飛び火する可能性がある。用心に越したことはない。

「大きな影響はないと思いたいですね。ハウゼンランドはアヴィラとアルシザスの後ろ盾があるんですし」

レイも苦笑しながらそう言うしかない。アドルバードもそうだな、と小さく呟いた。遠い南国とはいえ、大陸の中では無視できない国と繋がりがある分ハウゼンランドは手を出しにくい。
「こちらで少し注意を払っているように、と指示がありましたからな。殿下は心配せずに他の公務に励んでください」

アドルバードの報告から国王が下した結論だ。ディークもアドルバードが安心できるように笑って言う。なおも釈然としないアドルバードにディークは付け足した。

「まがりなりにも結婚前の御身ですからな。何かあったら娘に申し訳ない」

「まったくもってそのとおりですが、娘の前で言いますか」
「言って何が悪い？」

ふんぞり返る父に、レイは呆れてため息を吐く。

「おまえはシェーナの忘れ形見だ。幸せになつてもらわにや俺はいつまでも向こうに行けんだろっ」

久しぶりに聞いた名前に、レイは驚いた。シェーナというのはレイの母——ディークの妻の名前だ。

「まだまだ向こうへ行く予定なんてないでしょう」

デイクもいい年ではあるが、まだ現役だ。当分騎士団長の座を退くことはないだろう。

「当たり前だ。すっかり往生しないと、シェーナに叱られてしまう」
「……さらつとスルーしたけど、俺なんかすごい責任重大な感じのこと言われた気がする」

幸せになつてもらわないと云々。

アドルバードもちろんそのつもりだが、他の人の――まして婚約者の父から聞かされると重い。

「妻を迎えるというのはそういうことですよ、殿下。ましてあなたは国主となられ、我が娘はそれを生涯支えていかねばならぬのですから」

「父上、アドル様にばかり圧力をかけるのはやめてください。私が選んだ道なんですから」

次々とアドルバードに押し掛かる言葉に耐えかねてレイが割つて入る。デイクは「これだ」と苦笑した。

「父というのはいつも敵ですなあ。あの娘ですらこんな様子です」

「ご、ごめん俺どっちの味方していいのか分かんない」

もちろんデイクから与えられるプレッシャーもキツイと言えばキツイんだけど、もつともの気がするしそれを受け止めるのが務めのような気もしないでもない。かばってくれるレイの気持ちはそれこそ天に昇るほど嬉しいんだけど。

「おまえは本当に、昔から茨の道を進む子だなあ」

デイクが珍しく父親の顔になつて、レイの頭を撫でた。レイは少し恥ずかしそうだが逃げることもできずに大人しく撫でられていた。

「剣の誓いをたてた時も、今回も、すべておまえは自分で決めてしまふ。ひどく険しく辛い道になると分かっているけど、おまえは進んでしまふ。これから進む道とて、楽なものではないだろう」

王妃になるということ。

国王の妻として生きること。

一度は騎士として生きると決めた彼女にとってのその道は、容易いものではないはずだ。そしてレイの家柄や過去を挙げ連ねて叩く人間もいるだろう。それら全てから守ることはできないと、分かっているからアドルバードも悔しい。俺が守るから大丈夫、とこの場で言えないことが。

「たとえどんなに辛い道であつても」
俯くアドルバードの隣で、レイはぼつりと呟いた。

「それに上回る幸福があると信じていますから」

だから大丈夫です、と微笑むレイに迷いはなかった。アドルバードは胸がいつぱいで苦しくて、ただ嬉しいと伝えるためにレイの手を握りしめた。

出来ることならここで愛してる、と何度でも言いたかった。

「……おまえは賢い。そう言うのなら、間違いはないだろう。殿下、恐れ多くも私は、あなたも我が息子のように思っております。なかに、舅になると言っていびつたりはしませんからご安心ください」

「そんな心配はしてないよ、デイク」

苦笑してそう答えると、デイクも笑った。いびりなんてそれこそデイクに似合わない。気に食わないのなら真正面から叱りつけてくるだろう。

「あと何年かすれば、私は剣聖の座を返上することになるだろうな」
そうすれば晴れて隠居生活だ、とデイクは笑った。

「別に返上なさらずとも良いでしょう、これといった規定のある称号でもないんですから……」

レイは首を傾げながらそう言うと、デイクは「いいや」と答える。

「おまえらが一人前になれば、もう要らん名だ。国としては剣聖がある方が理想的なんだろうが。その時はおそらくルイあたりが継げばいいだろう。思い切りに欠けるが、アレの剣筋は確かだ。修羅場

をくぐって少し引きしまったようだし」

もう俺たちの時代ではなくなる、とディークは何かを懐かしむように呟いた。遠き若かりし時に思いを馳せているんだろう。

これから自分が時代を背負っていくという現実^に気を引き締めながら、アドルバードはレイを見た。

何故か、ひどく切ない瞳をしていた。

18：俺があげられるのは、俺自身くらいしかない

「――イ、……レイ」

名前を呼ばれて、レイははっとした。

気づけばもう父の部屋から出た後だ。

「……アドル様？ 申し訳ありません、気づきませんでした」

呼んでいたのが隣を歩くアドルバードだと分かると、レイは素直に謝罪した。しかしアドルバードは何も言わずにレイを見つめる。

「……アドル様？」

何か、と問おうとしたレイの頬に、アドルバードはそっと触れる。壊れ物を触ってるみたいだ、とレイは少し他人事のように思った。

「何か、あったか」

真剣な瞳に、レイは微笑みながら「いいえ」と答えた。

「嘘をつくな。おまえの嘘を俺が見抜けなと思うなよ」

即答されて、レイは困った。昔から変わらない、真っ直ぐすぎる瞳に見透かされてしまいそうで、視線を下げた。

「……大丈夫です、なんでもありません」

こんな態度で「大丈夫」と言っても何の説得力もないな、と内心で苦笑した。

「レイ」

ぎゅっと手を握られた。

温かな声がレイの名前を呼ぶ。ずっとずっと、いとおしいと思ってきた声。

「俺は、おまえの婚約者なんだ。辛いことがあったら俺に甘えればいいし、悲しいことがあったら俺の胸で泣いていい。それはおまえ

の特権なんだから」

だから、とアドルバードは悲しげに続けた。

「辛いのも悲しいのを、隠そうとするな」

隠されると、俺が辛い。そう苦しげに呟かれると、レイも弱い。

レイにとってもアドルバードの幸せが最上なのだから。

——別に、辛いわけでも悲しいわけでもない。ただ、少し胸にぽっかりと穴が開いたような気分になるだけだ。

「レイ」

再度急かすようなアドルバードの声に、レイは笑った。

「移動しませんか？ アドル様」

こんな廊下で話すこともないだろう、とレイは言う。通りかかっているのは使用人ばかりだが、真剣な雰囲気になり始めたあたりから興味津津だという様子が感じられる。

アドルバードも苦笑いで頷いた。

城の中で他人の目がない、という場所はそう多くない。そして婚前前の二人が気安くアドルバードの部屋に行くのもどうか——という話になって、結局は温室へと向かった。

温室には年中花が咲き乱れている。雪国のハウゼンランドで、庭師が丁寧に育ててくれているからだろう。

「はい、座って」

温室の中にあるベンチまで連れて行くと、レイは素直に座った。

やはり少しおかしい。

「レイ、何があった？ なんでもいいから、俺に話して」

「……アドル様、本当にそんな大げさなことではないんです」

ベンチに座るレイの前に跪いて、アドルバードは懇願するように問うと、レイは困ったように笑った。

「おまえに関すること、些細なことはひとつもない」

少なくとも俺にとっては、と言うとレイは少し恥ずかしそうに笑

う。

「……本当に、ただの子どもじみた嫉妬なんです」

嫉妬、という単語にまさかとは思うが、先程までのデイクとの会話の中でアドルバードを取られまいと嫉妬するようなことは何一つなかったはずだ。

「子どもじみててもいいよ」

跪いて、まるで王子様がお姫様を気遣うように、優しく手を握りながらアドルバードはレイを見上げた。

「……父は言いました。剣聖の座を、ルイに譲ってもいいと」

剣聖——デイク・バウアーの働きを讃えて国王が作った、彼だけの称号。しかしその名が他国への牽制にも使える今、デイクが引退した後にも存在して欲しい。それは国の考えとして当然だった。だからデイクも息子の名を口にした。

「悔しかったんです。その時に私の名が出なかったことが。騎士であつた頃、誰よりも強くなろうとしてました。あなたの為に。あなたを守る為に。でも、同時に、私は憧れていたんでしょう。剣聖という、唯一の称号に」

国王が認めた最高の騎士。それはどんな騎士も憧れただろう。

「剣の腕で負けるつもりはありません。それに、私はアドル様と結婚するんですから、剣聖にはなれません。頭では分かっているんです」

けれど、納得できない。レイは静かに呟いた。

「剣聖の名も、バウアー家も、私が男であれば継いでいたんだろうかと、そんな意味のないことを考えてしまったんです」

レイは自分の言葉に失笑するも、アドルバードは笑わなかった。彼女が誇り高い人だということは、誰よりもよく知っている。

「……男だったら、俺は少し困っちゃうなあ」

苦笑しながらアドルバードは呟く。

「俺がおまえにあげれるものなんて、ほとんどない。剣聖という称号も、家督も無理だ。安全だって保障できないし、苦労させるのだ

って目に見えてる」

「ごめん、と優しく呟きながらアドルバードは微笑んだ。レイはただ黙ってアドルバードを見つめた。

「俺があげれるのは、俺自身くらいしかない」

それでもいい？ とアドルバードはレイを見上げた。

もしここでレイが首を横に振るのなら――また元の関係に戻ってもいい、とアドルバードは少しだけ思った。レイの幸せがアドルバード個人の中では最優先事項だから。

「何、言ってるんですか」

レイは苦笑して、呟いた。手が伸びて、アドルバードの頬に触れる。

「あなた以上に欲しいものなんて、ありません」

しっかりと答える声に、アドルバードは微笑む。頬に触れる手を握りしめて、優しく愛しい婚約者を抱きしめた。

「あなたさえいれば、それでいい」

腕の中でそう答えるレイに、アドルバードは「うん」と呟いた。

続けて「俺もだよ」と。

「私はもう騎士ではありません。剣聖の称号も、家督も、望んでいないわけではないんです。望んでいたのは、過去の私だ」

言い訳のように説明するレイの頭を、撫でてやりたかった。けれど綺麗に結いあげた頭を撫でれば崩れてしまうかもしれない。せっかく綺麗なのにそれはもったいないな、とアドルバードは抱きしめる腕の力を強めるだけにとどめておいた。

「私は、過去の私が望んでやまなかったものを手に入れたんです。これ以上は望みません」

きっぱりとそう言うレイがアドルバードは愛しくて仕方なかった。こうして少しでも弱音を吐いてくれるようになったことも含めて、全てが嬉しい。

「うん、でも我慢しなくていい。どんな話でも俺は聞くから、レイも聞いて。愚痴でもなんでも、必ず聞くから」

もっと甘えて欲しいな、なんていうのは、少し過ぎた贅沢だろうか。

約束な、と耳元で囁くと、レイは少し遅れ気味に小さく頷いた。

19：い、いちゃいちゃなんてしてないっ

アドルバードは隣に座っている所在なさげなルイを見た。ただ待っているだけ、というのは慣れていないだろうなあ、と紅茶を飲む。現在リノルアースとレイはドレスの試着をしたり大忙しだ。

以前ならルイはあれをしるこれをしるで忙しかったが『婚約者』の今は大人しく姫君の着替えを待っているしかない。

「ちよつとー！　ぼんやりしないで感想言いなさいよコレはどう？」

隣の部屋から着替えて出てきたリノルアースがルイとアドルバードの前でくるりと一回転する。今着ているのは空色のドレスだ。爽やかな色合いだが、リノルアースにとっても似合っている。

「え、あ、すごく綺麗です」

「——で？」

毎回同じような感想のルイに、リノルアースはすっかりご立腹だ。「似合うけど、少し子どもっぽいよ。結婚式に着るんだったらもっと落ち着いた色にしたら」

フォローするようにアドルバードが感想を言ってもリノルアースの不機嫌そうな顔は直りそうにない。婚約者からいろいろ聞きだしたいというのは乙女心的には仕方ないことなんだろう。

「リノル様、こちらはどうですか？」

同じようにドレスの試着をしているはずのレイも、すっかりフォロー役に回っている。着たドレスはまだ数着だけだ。リノルアースの話だとレイ用のドレスを十数着用意識したとのことだが。

「……緑？　綺麗だけど、あまり着ないのよね」

レイが持ってきたドレスの色を見てリノルアースが首を傾げる。リノルアースはスタイルは良いが、身長は平均的な女性と変わらないので持ち込まれたドレスの量が多い。ここから選んで、さらにリ

ノルアースに合わせて調節するらしい。

「似合うと思いますよ」

「そう？ レイが言うなら着てみようかしら」

レイの双子の手綱の握り方は絶妙だ。リノルアースは素直にまた隣室に戻って着替え始めた。

「……ルイ、もう少し気のきいた言葉は使えないのか」

はあ、とため息を吐きながらレイは弟を見る。自覚はあるのだろう、ルイも申し訳なさそうに身を小さくしていた。

「そ、そもそもドレスなどは自分の専門外ですから。ろくなこと言えないのは分かりきってるじゃないですか」

「いやー……でももう少しまともなこと言えると思う」

リノルアースが綺麗なのは最早言うまでもないだろうに、とアドルバードでさえ呆れる。

レイは藍色のドレスを試着したまま、次のドレスを着ようとしていない。

「……それ、気に入った？」

色合いこそは地味だが、裾には金糸で刺繍が施されている。レイの銀髪も長くなったせいか、とても華やかな印象だ。

「いえ、そういうわけでもないのですが……華やかな色は、苦手なので」

こういう色の方が落ち着きます、と苦笑するレイが可愛くて、アドルバードとしてはこれだけで女性陣の着替えを待つ価値はある。

「アドル様はどんな色を着る予定ですか？」

レイは休憩に、とアドルバードの向かいに腰を下ろしながら問う。いつもの指定席は今ルイが座っている。

「俺？ まだ決めてないけど」

「そうですか……一応は色合いは合わせた方がいいかと思ったんですが」

自分の好みというよりアドルバードと並んだ時の見た目を選ぶとするレイに、アドルバードは内心嬉しくてしかたなかった。今回、

シェリスニアとウィルザードの結婚式でのパートナーはレイなのだ。いつものリノルアースではなく。

「レイが好きな着ればいいよ。なんなら俺が合わせるし。女の方が準備にも時間かかるしな」

「そうですね、それが私には難しいんですが」

苦笑するレイとにこやかに紅茶を飲んでいると、ルイが恨めしそうにアドルバードを睨んできた。

「……ルイ。その視線痛いんだけど」

「なんですか。人の目の前でいちやいちやして。見せつけてるつもりですか」

リノルアースの機嫌を損ねたせいだろうか、ルイもいつもに増して鬱陶しくなっている。

「い、いちやいちやなんてしてないっ」

いや、してたけど。内心ではそう思いつつアドルバードは否定した。レイは我関せずでカップを置き、するりと立ち上がる。

「……しょうがないですね、リノル様の様子を見えます。ルイ、次はきちんと感想を言うように」

姉に注意をされると、ルイも弱い。口ごもりながらも「……はい」と答えて小さくなった。

隣室に入ると、ちょうどリノルアースがドレスを着終わったところだった。鏡越しに目が合う。

「あら、レイ。あのぼんくらはどうだったかしら？」

振り返ることなくリノルアースは鏡を見たまま微笑む。まだ怒っているらしい。

「一応注意はしておきました。慣れてないことなので少しは勘弁してください」

「分かってるけど、全部同じ感想じゃ機嫌も悪くなるわ」

むす、としたままのリノルアースを見て、レイも苦笑する。レイが選んだエメラルドグリーンドレスは、予想通りリノルアースにとっても良く似合っていた。式は夏の終わりだ。色合い的にも爽やかでいいだろう。先程の空色のドレスよりはずっと大人っぽい。

「……ルイの瞳も緑ですから、並んだ時に映えると思いますよ」

鏡越しにそう微笑みかけると、同じことを考えていたのだろうか――リノルアースは少し恥ずかしそうに俯いた。

「似合ってる？」

俯いたままりノルアースに問われ、レイはもう少しルイの前でも素直になればいいのに、と笑う。

「もちろんです」

きっぱりと言いつけると、リノルアースは嬉しそうに微笑んだ。本人は見られてないつもりかもしれないが、鏡に映っている。

「なら、次はレイね！ これを着てみて」

そう言って取り出したのは瑠璃色のドレスだ。今着ている藍色よりも明るめの色で、確かに夏に着るのなら相応しい色なのかもしれない。何よりたぶん、ルイの瞳の色と言ったレイに対する仕返しなのだろう。ドレスの色はアドルバードの瞳の色によく似ている。

「これが嫌ならこつちを着てね？」

極めつけに、とリノルアースは華やかなワインレッドのドレスを指差す。レイに選択肢は与えないつもりのようなのだ。

「……分かりました。リノル様は先に見せてきたらどうですか？」

諦めて着替え始めるレイを、リノルアースは大人しく待っていた。一人で戻る気はないらしい。

瑠璃色のドレスは、薄めの布を何枚か重ねて出来ていた。おそろく日の下を歩いた時は透けてとても綺麗だろう。もともと青系のドレスは自分の瞳に合わせて着ることが多かったし、ピンクや赤に比べると袖を通すのは精神的に楽だ。

リノルアースのようにドレスを着て胸が躍るようなことはない。けれど着飾ってアドルバードの隣に立った時、嬉しそうにしている

アドルバードの顔を見るのは好きだった。

20:……俺が基準かよ

リノルアースとレイが隣室に閉じこもって数十分。

「……長いですね？」

今まで着替えるために籠っていた時間よりも遥かに長く、アドルバードとルイを顔を見合わせて首を傾げた。

「そんなに着にくいドレスじゃなかったと思うんだけどなあ」

「……経験からくる言葉ですが、それ」

散々ドレスを着せられたアドルバードを横目で見ながらぽつりと呟いたルイに、本人は容赦なく腹に肘を入れた。そこらへんの痛い記憶は掘り返さなくていい。

そうこう騒いでいると、隣の部屋の扉がガチャリと開いた。

「レイ、ほら」

リノルアースの声が先に聞こえ、緑色のドレスに身を包んだりリノルアースが現れた。落ちついた色のそのドレスは、今までリノルアースが着てきたものとは雰囲気随分と違う。いつも着ているドレスと形は大差ない。しかし裾には金糸で蔓薔薇が描かれていて、袖には白いレースが飾られている。地味な色のドレスだというのに、リノルアースが着ることによって何倍も華やかに見えた。夏の木々の色だ。

ほう、とルイはため息を零す。見慣れているはずのアドルバードでさえ一瞬見惚れた。

その二人の反応に気づいたのだろう、リノルアースはふふん、と笑ってルイを見た。

リノルアースに急かされて出てきたレイは、先程よりも明るい瑠璃色のドレスを着ていた。薄い布が幾重にも重なっているので、裾

の方へいけばいくほど日の光に透けている。胸元には白いレースが縁どられ、よりいつそう明るい雰囲気になっていた。

「綺麗すぎて言葉もないみたい」

「リノル様」

肩をすくめるリノルアースに、レイが苦笑した。アドルバードもルイもまさにそのとおりなので何も言えない。

「……何かコメントは？」

リノルアースが催促するようにルイを見ると、ルイは心なしか少し顔を赤くして口籠もった。

「こ、言葉が見つかりません」

「——ふうん。ま、いつか。これにしよう」と

じろりとルイを見たあとで、リノルアースはくるりと振り返りドレスの調整に入った。頑張つて褒めるよりも困る方がいいとはどうすればいいんだろう、とルイは悩む。後学のためにも対応を覚えておきたいところだ。

「ルイ」

機嫌がいいとも不機嫌とも分らない顔で、リノルアースが振り返る。

「は、はい!？」

「ルイも、服は緑にしてね。一応あんたが私のエスコートするんだから」

変なカッコしたら許さないわよ、と念を押すリノルアースにルイは苦笑しながら頷いた。なんとなくだが——これは照れ隠しな気がする。

「どうせですから、リノル様を選んでください」

ねだるように、目線を合わせて言う。

「べ、別にいいわよ。あんた一人に任せるよりはずっといいと思うし?」

「それじゃあ、お願いします」

ルイの予想通り照れたように顔を赤くして答えるリノルアースの

反応に、ルイはかなり満足だった。

「アドル様？」

見惚れて硬直したままのアドルバードの前で、レイは首を傾げる。
「え、あつ」

レイの手が顔の前でひらひらと揺れたところで、アドルバードもやつと呪縛から解けた。目の前の恋人を見てまた赤くなる。

「……大丈夫ですか？」

怪訝そうなレイの顔を見て、アドルバードは何度も激しく頷いた。
「ちよ、ちよつと見惚れてた」

赤くなっているアドルバードに、レイはくすくすと笑って少し意地悪を言ってみた。

「ちよつと、なんですか？」

「——っ！」

思いがけぬ攻撃に、アドルバードの顔はますます赤く染まった。

「あ」とか「う」ともごもご呟いた挙げ句、キツとレイを見る。

「ちよつとだけじゃなくかなり見惚れました！ 以上！」

開き直りと言えないアドルバードのセリフに、レイはますます笑った。身長が伸びても年齢を重ねても、こういう時の反応は一向に変わらない。

「それなら、私もこのドレスにします。アドル様が気に入ったようですし」

「……俺が基準かよ。似合ってるし好きだけど」

「アドル様が気に入る方が、私が気に入るよりも重要ですよ。私がドレスを着るのはアドル様の為ですから」

さつくりとした追撃に、アドルバードはまた言葉を無くした。何度俺の心臓を止めれば気が済むのか、この人は。

「おまえさあ……っ」

すきなひとに、そんなことを言われて嬉しくない男がいるだろうか。ざわざわと騒ぎ始める胸を落ち着かせることに必死だ。いつだってアドルバードの心を騒がせるのはレイだ。しかもレイ本人も最近はそのを自覚している節がある。

「アドル様の準備はいつ……？」

レイの攻撃に息切れを起こしているアドルバードを軽く無視してレイが問いかけてくる。彼女としては自分のドレスの心配よりもアドルバードの服装の方が気になるらしい。

「暇を見つけてやろうかなあと思って。わざわざ作らなくても持ってるやつでいいかなーとか」

「それでしたら去年作ったものが良いんじゃないですか？ 紺色の」
アドルバードよりも熟知しているレイは現物を見ずに勧めてくる。
アドルバードも自分の記憶を掘り返して「ああ」と頷く。

「確かにレイのドレスにも合うかな。じゃ、そうする」

あっさりと決めて、アドルバードは笑った。シェリスネイアとウィルザードの結婚式はもう目前だ。決断が早いのは悪いことではない。

城の外で吹く風は、爽やかで夏の匂いを孕んでいる。窓の向こうへ目線を移せば、明るい太陽の日差しが眩しかった。

また季節がひとつ、巡ろうとしていた。

21: まったく、妬けるくらいに仲が良いな

ハウゼンランドの西に位置するネイガスは、ハウゼンランド同様南から北へと縦に長い国だが年間の平均気温はハウゼンランドよりも高い。そのネイガスの南へとアドルバードたちはやって来た。

季節としてはもうすぐ夏を迎える頃だが、ハウゼンランドの王都よりも南に位置するこの領地では一足先に夏を迎えているようだ。じりじりと熱い日差しが容赦なく照りつけてくる。

「……あつい」

早くも日差しに負けそうになっているのは案の定アドルバードのみで、他の三人は涼しい顔をしている。レイヤリノルアースなんてドレスを着てかなり着こんでいるのに違いないのにも関わらず、だ。「暑くても顔に出すわけにはいかないでしょう。一応は国賓ですよ」たしなめるようなレイの声に、同じように我慢しているのかな、とアドルバードは思った。

「大げさだろ。ウィルは王位継承権を放棄したって聞いたけど」国賓という扱いは自分が王族である以上しかたないのかもしれないが——実際はただ従兄弟の結婚式に参列するだけである。ウィルザードはあのハウゼンランドでの一件以来、アドルバードか——それ以上の働きを見せ、ついにはヘルダムにシエリスネイアとの結婚を認めさせた。ネイガスとしては次期国王候補に、という考えもあったが、ウィルザードは婚約が決まるとすぐに王位継承権を投げ捨てた。

「シェリーがこれ以上王族の面倒事に巻き込まれないで済むんですから、感謝したいところですね」

未だに慣れなさそうに、双子と並び騎士服ではない正装に身を包むルイが微笑んだ。大陸中の国がこれで婚約破棄だろうと思ってい

たのにも関わらず、ヘルダムはシェリスネイアを送り出した。あのアヴィランテの姫君が、王族でもない男に嫁ぐなんて。あれは世界中が驚愕した瞬間だったに違いない。

かくしてウィルザードとシェリスネイアの結婚式は、ネイガスの一番南の領地・ハーゲニアにてひっそり行われることになった。ひっそりと、といってもハウゼンランドの双子の他にアヴィランテ国王、さらには数人の王族が招待されているのだから豪勢なものだ。

会場となっているのはこれからシェリスネイアとウィルザードが住むことになっているハーゲニアの領主の館だ。広い庭にテーブルを並べ、あちこち花で彩ってある。王族の結婚式と考えれば質素すぎるくらいだ。

「屋外でやるなんて珍しいわねえ」

リノルアースは物珍しげに周囲を見ていた。ネイガス国王などは館の中で控えているのか、姿は無い。アドルバード達は控えの間で休んでいてくれ、とのことだが物珍しさが勝ったりリノルアースがあちこち見て歩いているのである。

「二人の希望らしいからな。静かに暮らしたいから、派手にやる必要はないって」

ネイガス国側にしてみれば、この結婚でアヴィランテと繋がりを持てた分ウィルザードの働きは評価しなくてはいけない。そこで本人達が強い希望を出してしまうと、頭ごなしに拒むことも出来なかったのだらう。ウィルザードの働きはシェリスネイアとの仲を認められたことを考えれば、それだけ素晴らしいものだったと分かる。

「やあ、お揃いで」

招待客がまだまばらにしかない会場で話しこむ四人のもとへ、につこりと微笑みながらやって来たのは、アヴィランテ国王ヘルダムだった。相変わらずと言うべきか、食えない顔をしている。

「お久しぶりです、兄上」

苦笑しながらルイが一番に挨拶する。ヘルダムを兄、と言うのにも随分と慣れてきているようだ。アヴィランテでの生活のおかげだろう。

「久しぶりだね、元気そうで何よりだ。相変わらず目立つね君たちは」

「あらありがとう。それで、アヴィランテ王がこんなところをうろついていいのかしら？」

見たところヘルダムには護衛がない。もちろんアヴィランテからこちらに来るまで一人だった、などということはありえないが。

「それは君たちも同じだと思っけどね」

「形だけの護衛なら向こうにいますけどね。要らないですよ、さすがに」

苦笑しながらアドルバードが呟く。一応はセオラスや騎士団の数名が護衛として共にやって来ているが――ルイやレイが一緒にいる以上そんなものは無用だ。レイは落ち着かないという理由でいつもドレスの下に武器を隠しているようだし。

「……そこで固まられると、周囲の視線を集めてるってことに気づいたらどうだあんたら」

あんたらみたいな有名人が、と呆れたような声がした。振り返ると、新郎と新婦が並んで立っている。ウィルザードは淡い灰色の上着に、胸元に白い薔薇をさしている。隣に寄りそうシェリスネイアは、真っ白なドレスに金と銀で刺繍が施されていた。頭から薄いベールをかぶり、髪にはウィルザードと同じく白い薔薇が飾られている。

「お久しぶりですわね、来て下さって嬉しいわ」

にっこりと微笑むシェリスネイアからは、以前感じたような影はなかった。幸せに満たされたその笑顔はその隣に立つ人間が与えて

くれたものだろう。

「久しぶりね、シェリー。今のあなたは世界で一番綺麗な花嫁だわ」
リノルアースが素直にそうシェリスネイアを褒めた。久しぶりの再開に喜ぶ姫君二人は、この場の誰よりも華やかだ。

「幸せそうでほっとした。シェリー」

すっかり兄の顔になっていくルイがシェリスネイアに歩み寄る。
シェリスネイアもルイを見上げて微笑んだ。こうして並んでいると、
けっこう似ている兄妹だ。

「お兄様も。リノルとの婚約、おめでとうございます。式にはもちろん呼んでくださいますよね？ 私も楽しみにしてますのよ」

「それはもちろん」

答えるルイに、リノルアースが横から「当たり前だわ」と呟いた。
その言葉にシェリスネイアが嬉しそうにくすぐすと笑う。

「……まったく、妬けるくらいに仲が良いな」

そんなやりとりを見ながらヘルダムは苦笑した。シェリスネイアの兄なのは、何もルイ一人ではない。

「次は彼と姫君の結婚か。それで、君たちはどうなっているのかな」
祝いの言葉も言いそびれているアドルバードと、それに寄り添っているレイを見ながらヘルダムは問う。ヘルダムの言う彼はルイのことだろう。おそらくこちらを氣遣って『本当の名前』で呼ばないのだ。

「おそらく早くとも来年の話になるでしょうね。リノルアース様たちと一緒に、という話もありましたが、そうするにはあまりにも時間がありませんし」

リノルアースとルイとの結婚は、国同士の絡みもあり早めに済ませるしかない。そもそもリノルアースはもう十八歳で、結婚適齢期としては少し遅いくらいだ。

「それこそ、そちらにそういう話はないんですか？」

何気ないアドルバードの問いに、ヘルダムは「そうだねえ」と呟く。大国アヴィランテの国王へ嫁ぐともなればあちこちから手が拳がるだろう。

「運命があれば、ね。まあ心配しなくてもある程度の年齢にあったら身を固めるつもりだよ。どこかの国王と違って」

ヘルダムの言つどこそその国王を思い出して、アドルバードは苦い顔をした。

22：一つ忠告しておこう

こつも美しい人が並んでいると圧巻だね、とヘルダムが呟いた。最近ではハウゼンランドは美人の産地、なんて冗談みたいな噂が流れるようになっていいるらしい。純白の花嫁衣装に身を包んだシェリスネイアが綺麗なのは当然として、地味な色合いのドレスを選んだはずのレイヤリノルアースもあちらこちらから視線を集めている。「よく耐えられるものだね、俺だったら閉じ込めて他の男の目につかないようにしてしまうよ」

につこりと笑いながら、ヘルダムは冗談とも本気ともつかないことを言う。

「本人が望まないことはしません。まあ、慣れもありますけどね」リノルアースに扮していた頃といい、背が伸び自分自身が注目を集めるようになった時といい、周囲の視線を集めるということには慣れているのだ。アドルバード自身が。そして以前に比べ、レイと並んで遜色ない外見をしている自信もある。中身は別としても。

「では、一つ忠告しておこう」

くすり、と意味ありげな笑みを零してヘルダムが呟く。アドルバードは周囲には聞こえない程度のその声に釘付けになった。小さな声、それはつまりアドルバードのみに伝えようとしているものだ。

「東が騒がしいのは、君も知っているだろう」

「それは、もちろん」

ガデニア砦での騒ぎはまだ記憶にも新しい。そもその原因は東の荒野での騒ぎだ。

「新しい国が出来たようだね。確か——そう、レナンドという名だったかな」

「遠い地にいるわりに、耳が早いですね」

新しく国が出来てはつぶし合う東の荒野に目を向ける国は少ない。そもそも国交を結ぶ前にまた国の名が変わるのだから、国際的な地位は低いのだ。

「そのレナンド王はそれなりの手腕らしい。おそらくこれから目立ってくると思うよ。しかし新興国の王となれば甘く見られるのは必然だろうね」

国同士の場に顔を出すようになる、ということだろうか。そうなればいずれアドルバードが王となった時に顔を合わせることもあるだろう。そういう意味での注意だろうか、とアドルバードは首を傾げた。

「まあ、それは余談だよ。東の民族の性格をきちんと覚えておくといい。あいつらはね、欲しいものは力づくで手に入れる人間たちだ。そして力のある者には従順だよ」

それはつまり、力のあるアヴィランテにはたやすく膝をつくという意味だろう。だからヘルダムは余裕のある表情を崩さない。

「――ハウゼンランドが危険だと？」

アドルバードはその青い目を細めてヘルダムに問うた。ヘルダムは何も言わずに、ただ微笑む。

「土地を狙うほど愚かではないと思うけど、ね。気をつけるに越したことはない。それに向こうは国との繋がりを欲しがるだろうから」

「……リノルは、もうじき結婚します」

ヘルダムの言う繋がりは、国同士の結婚だとアドルバードは読んだ。新興国が欲しがるのは伝統だ。それはどう足掻いても一朝一夕に手に入るものではない。由緒ある血筋を迎え入れない限り。

「そうだね、でも出来ることなら籠に入れて隠してしまった方がいいかもしれないよ。あの姫君は知恵が回っても力はない」

「そ、それは――」

謎かけのような、間接的な物言いにアドルバードは黙った。自分の読みが間違いでないのなら、相手は――新興国のレナンドは、既成事実を作ってしまうばいいと思っていると――言われているよう

な気がする。リノルアースは策略をめぐらすことはできても、いざという時に自分を守りきれほどの力はないから、と。

青ざめたアドルバードに、ヘルダムはただ微笑んだ。

「相手は人妻でも関係無しとしていた蛮族だよ。君の甘い考えで大事なものを守りきれるか、きちんと考えておくべきだ」

ぐさりと胸に刺さる忠告に、アドルバードは立ちつくした。

血生臭い、薄汚い世界には慣れたつもりだったが、やはり自分はまだまだ甘かったんだと知る。認識も考えも、何もかもが王としては足りない。

そのアドルバードの耳元で、ヘルダムはさらに毒を吐いた。

「あいつらが欲しがるのは何も王族だけじゃない。伝統ある国の血であるなら、貴族の令嬢でも良いだろうね」

——それは、レイも危険なのだ、告げられているようだった。

「アドル様？」

レイの声で、アドルバードはその場に固まっていたことに気づく。はっと顔をあげるとレイは心配そうにこちらを見ていた。

「そろそろ式が始まりますよ？ 大丈夫ですか？」

そう言われて周囲を見れば、先程までいたシェリスネイアとウィルザードの姿がない。控室にいた他の招待客もいて、自分がどれだけぼんやりとしていたか思い知る。

「悪い、ぼーっとしてた」

「……お疲れですか？」

心配そうなレイに「大丈夫だよ」と微笑んで誤魔化す。レイは納得できていなさそうな顔をしていたが、わあっと周囲が声をあげたことで会話は打ち切られた。

降りしきる数多の花びらの中、シェリスネイアとウィルザードが並んでやってくる。

小さな子どもが二人の行く道に並んで、先程から花の雨を降らせていた。色とりどりの花びらが二人を祝福するように優しく降り積もっていく。

「……綺麗ですね」

レイが隣で微笑んでいた。アドルバードはそのレイの横顔の方にはばかり見惚れているけれど——そこは言わずに「そうだな」と返しておく。

王族の結婚式としては、あまりにも質素だと言われるだろう。けれどシェリスネイアは幸せそうだった。花の雨に降られて、ごく少数の人々たちに「おめでとう」と言われているだけで。花の馬車で王都を巡らなくても、たくさんの国民の拍手を受けずとも。

「幸せそうだな」

ウィルザードは分かっていたのかもしれない。シェリスネイアにとっての幸福が。そんなことを思いながら随分と男らしくなった従兄弟へアドルバードは祝福の拍手を送った。

「あれで女嫌いだったなんて信じられないわよねえ」

同じように拍手を送っていたリノルアースは、ウィルザードを見ながらそう呟いた。

「……女嫌いというか、あれはおまえが嫌いだっただけなんじゃないか」

それがトラウマで女全体が苦手になっただけで。

「失礼ね、こんな美人を捕まえて。女に幻想を抱いて勝手に幻滅した男の方が悪いわ」

「……リノル様、ちゃんと祝うつもりあります？」

友人の結婚式の最中に躊躇いなく悪口を零す婚約者に、ルイは苦笑いをしながら問う。ウィルザードはどうでもいいが、ルイにしてみれば妹の結婚式だ。

「もちろんよ、シェリーは大事な友達だもの」

きつぱりと言い切るリノルアースの顔に嘘がないから、それもまた分かりにくい。

「私が苦手っていうならちようどいいわ。あの馬鹿、シェリーを泣かせたらただじゃおかないんだから」

捻くれたリノルアースの言葉に、アドルバードやルイはこっそりと頬を緩めた。

23：まだ、夢を見ているようですわ

式が終わると、ヘルダムは早々に帰ってしまった。少し寂しげなシェリスネイアに優しく声をかけながら、一方では「そう暇でもないからね」と残して。アヴィランテほどの大国の王となったばかりということもあり、本人の言うように暇ではないのだろう。今回の訪問もかなり無理をしたに違いない。

「しっかりと俺にシェリスネイアをよろしくね、と言い残して行きましたよ、兄上」

苦笑しながらルイはグラスに注がれたワインを飲む。式も終わり、夜には屋敷の中でパーティもあったが、今はもうすっかり静かになっている。今はその余韻を楽しみつつ男たちだけで飲んでいた。

「抜け目ないな、あの人も。それよりウィル、おまえ結婚したその日に花嫁放っておいていいのか？」

暢気に酒の席に加わっている従兄弟を見ながらアドルバードが問うと、ウィルザードは余裕の笑みで「平気だよ」と言った。

「本人がリノルたちとゆっくり話がしたいって言ってるんだ。まああと少ししたら部屋に戻るけど」

今日のような日でなければ夜通し女同士で語りあうといいと言ってやれるが、さすがに結婚初夜ともなるとそうはいかない。本人同士の問題よりも、体面の話だ。

「……それにしても、あの人も性格悪いよなあ。おまえらには東が怪しいから気をつけろって忠告しておきながら、俺には何もなしだぜ？ 曲がりなりにも義弟に」

ウィルザードは重たいため息を吐き出しながらそうぼやいた。ちようどアドルバードがヘルダムからの話をぼつりと漏らした後だ。

「性格悪いというよりは……そのくらいどうにか出来ない男にシェリスネイアは任せない、という意味だと思いますよ」

この中では一番ヘルダムの性格を掴んでいるであろうルイが言う言葉はかなり説得力がある。

「万が一、シェリスネイアに何かあった場合はアヴィランテの力をもつて必ず救出するでしょう。そしてたぶん、その時は確実に離縁させられますね」

「……ルイ、それ冗談に出来ないから止める」

簡単に想像できる話に、アドルバードもウィルザードも青ざめた。あの男ならやりかねない。

「それを考えると俺よりシスコンっぽいよなあ」

天井を仰ぎ呟いたアドルバードに、ウィルザードが「おまえもかなりのもんだよ」と笑った。否定できないので何も言わない。

「でもまあ、なんだかここは平和で政治絡みのこととは無縁そうだな」

ハーゲニアはネイガス王国の中でも小さな領地だ。しかし豊かな土地でもあり、貴族の別邸なども多い。ウィルザードはこれからハーゲニアの領主としてやっていくことになっている。

「そういう土地を選んだんだ。あいつにはもう汚い世界を見て欲しくないしな」

ウィルザードがグラスを傾けながら微笑んだ。そこそこ飲んでいるが、ウィルザードはもとから酒に強いのでこの程度では酔わない。一番弱いアドルバードは自主的に調整してる。

「ここでのんびり暮らして、そのうち子どもも出来て、二人で子育てして、穏やかに年をとっていいればいい。本当は領主とかも面倒だったんだけどな。さすがに二人で田舎暮らしは無理だった」

本当は王族や貴族にも関わらないような生活にしたかったんだろう。しかしお互いが王族であり、かつシェリスネイアが大国の姫君ともなれば無理な話だった。

争いなんて関係ない暮らしをしよう、プロポーズの言葉は、図らずも以前に彼女に告げたものと同じになった。

贅沢な夢ですわね、とシェリスネアは笑った。笑いながら、しっかりとウィルザードの手をとった。夢なんかで終わりにはしないと誓ったのも覚えている。

生まれ育った環境はどうにもできない。彼女の過去を否定するつもりもない。けれど、これからの人生はそんな汚い世界に関わらせたくはなかった。だから手に入れるまで努力してきた。それを。

「——どこの馬の骨か分からねえ奴に邪魔される気はないな」

ウィルザードの呟きに、アドルバードもルイも笑みで返した。

グラスに残っていた赤ワインを一気に飲み干すと、ウィルザードは立ち上がる。時計を見れば飲みはじめてから随分と時間が経っていた。

「じゃ、お先。あんたらも明日には帰るんだろ？」

「ああ、昼ごろまではここにいます」

それなりに飲んでいたはずなのにほろ酔い程度のウィルザードは「そうか」としっかりとした返事を残して部屋から出ていった。残ったアドルバードとルイは微妙な気分だ。

いいなあ、という本音が零れてしまっても仕方ないと思う。成長したとはいえ年頃の男子としては。

「あと少しの辛抱ですよ」

残りを飲み干すルイも余裕があるのでアドルバードだけが取り残されている感じは拭いようもない。結婚の順番も時期も納得済みではあるが。

「……それより、どうするんですか？ 東のことは伝えますか？」

レイとリノルアースに、という意味だ。何もしかけてくると決まったわけでもないのだから、言わないでおいても問題はない。まし

て結婚間近の女性に不安にさせるようなことはあまり耳に届けたくないが――。

「自己防衛の意味を込めるなら、言っておくべきなんだろうなあ」
リノルアースにおいては大陸でも有名な姫君だ。可憐だった容姿は今は美しさまで兼ね備えている。一言伝えておくだけでも、聡いリノルアースは警戒を怠らないだろう。レイにおいては実のところあまり心配していない。彼女の強さはアドルバードが一番よく知っている。剣を握れば大の男に囲まれても圧倒するし、丸腰であつても一対一なら勝機がある。

「俺としてはあまり言いたくないですね。あくまで怪しい、という憶測の域を出ていないですし」

「……だよなあ。たとえ怪しくても王族がはいはい国外を出歩くとも思えないし」

けれど気になるのはあのヘルダムが言い残した、ということだ。それがまるで予言のように感じてならない。

「とりあえず保留。ハウゼンランドに戻ったら少し調べてみよう」
そうまとめると、ルイは大人しく頷いた。

ウィルザードが身支度を整えて部屋に行くと、シェリスネイアは既に待っていた。

「随分とゆつくりされていたのね」

微笑みながら厭味ともとれることを言われるが、表情から察するに怒っているわけではないらしい。

「まあ、いろいろ積もる話もあるさ」

苦笑すると、シェリスネイアは「それもそうですわね」とあつさりとした様子だ。ウィルザードとしてはそれなりに緊張もしているし、これからどうしたものかと悩んでいるのだが。

「……まだ、夢を見ているような気分ですわ」

ベットに腰かけたまま窓の向こうへ目をやって、シェリスネイアが呟いた。

「夢じゃない」

そう答えると、シェリスネイアはウィルザードを見上げて微笑む。出会った頃とは比べようもない、優しい微笑みだ。

「そうですね。やっと現実だと実感できてきてますわ」

「それはまた、随分と鈍い奥方だな」

「こんな大事な日に新妻をほったらかして友人と酒を酌み交わす旦那様もいかなものかしら」

それは公認だったろうというか、シェリスネイアも同じようにリノルアースたちと話していたのだから、反撃の材料にするのは卑怯な気がしないでもない。けれど楽しいなシェリスネイアを見れば、言い返すこともできなかった。

「思えば運命だったのかもしれませんがね、私はハウゼンランドに行ったことも、あなたと出会ったことも。あれからは本当に怒涛の日々でしたわ」

兄を見つけ、初めて恋をして。恐ろしい兄王からの呪縛からも解き放たれて。今は昔と比べると随分楽に息をしている。

「ならこうして、結婚したことも運命か？」

意地悪のつもりで問うと、シェリスネイアは真面目な顔で「いいえ」と答えた。

「あなたが諦めずに手を伸ばしてくれたから、ではなくて？」

高嶺の花よ、小国の王子では釣り合わぬ姫君よ、と想いを飲み込んでしまえば繋がらない縁だった。

「さあな。お姫様が手伸ばしたのかもしれないだろ？」

しかしウィルザードは誤魔化すように笑い、シェリスネイアを抱き寄せる。運命かどうかなんて、今となってはどうでも良かった。

「——愛してる」

その一言を、愛しい人に伝えることができるのならば。

24：一番変わったのは、あなたですよ

賓客であるアドルバード達は、それぞれ個室を与えられた。湯浴みも済ませ、部屋に一人になったところでレイは妙に落ち着かない気分になる。部屋は領主の屋敷ということを考慮に入れても広く豪華なものだ。天蓋付きのベットに、ふかふかの絨毯が敷かれている。調度品のどれもが一級品ばかりだ。

「……新しくそろえたんでしょうね」

もともとはネイガス王家の別荘として使われていたと聞く。それでも異国からやってくる花嫁のために屋敷の中身は素晴らしいものを取りそろえたんだろう。

ふう、とため息を吐きながらレイは長椅子に座った。もともとが弱小貴族の生まれで、騎士として過ごしてきた日々が長いこともあって、レイは質素な暮らしに慣れている。逆に、こういった豪華なものにはあまり慣れない。自分が使う、ということに関しては特に一人で寝るには広すぎるベットで眠るより、ソファで寝た方がよほど安眠できるような気がした。ハウゼンランドの王子の婚約者としてここにいる以上、そんな真似もできないが。

少し夜風にでも当たろうか、とストールを肩にかけてレイは部屋を出る。中庭で少しぼんやりとすれば眠気もくるかもしれない。

騎士であつた頃に比べて、今は運動量も減っている。おかげで疲れを感じるようなこともなく、夜はあまり寝付けなかった。疲れて熟睡するということは以前からそうなかったが、ベットに入っても目が冴えたままというのは存外に困る。

夜の風は涼やかだ。レイの銀髪をさらりと撫で、暗闇の中で揺らす。どこからか甘い花の香りが漂ってきた。星空は静かに輝いて、淡い光を地上へ届ける。

「――レイ？」

夜闇に溶けてしまいそうな、小さな声だった。

それでもレイがその声を聞き逃すことはない。成長し低くなった声でも、どんなに小さな声でも。ましてそれが自分の名を呼ぶものであるなら、なおさら。

「アドル様」

振り返ると、アドルバードは少し驚いたような顔をしてこちらを見ていた。

「こんな夜に何してるんだよ。風邪ひくだろ」

ストールを肩にかけているとはいえ、既にレイは夜着に着替えている。季節は初夏とはいえ、薄着だったのは確かだ。

「眠れなかったので、少し風にあたりに。アドル様はやっと部屋にお戻りですか？」

レイは意地悪げに笑いながらアドルバードを見る。かすかに香る酒の匂いは、今まで酒盛りをしていたことを如実に告げていた。

「主役が部屋に戻ったからな。俺はそんなに飲んでないよ」

「当然です、それほど強いわけじゃないんですから、ほどほどにしてくださいと」

レイはアドルバードを見上げながらくすくすと笑った。アドルバードが酔い潰れた時は決まってレイが介抱していたのだから、限界も彼女の方が詳しい。

こつん、とアドルバードがレイの額に自分の額を合わせて、目を閉じる。

「……アドル様？」

酔っているのだろうか、それとも甘えているのだろうか。視界には目の前の人しか映りこまないほどに近い距離だ。

「ちよつと。なんだかいりいる変わっていくなあ、と思って」

苦笑しながら呟くアドルバードに、レイは黙った。静かにアドルバードの言葉を待つ。

「今まで当たり前だったものが、ここ一、二年で瞬く間に変わっていく。俺は、少し前までは今よりずっと甘えた子どもだったのになあ、とか。おまえは騎士だったなあ、とか」

ぼんやりしていると、取り残されそうさ。

酔った勢いの言葉なのか、少し弱々しいアドルバードのセリフに、レイは優しく微笑んだ。

「変わらないものなんて、この世にはありませんよ」

するりと伸びてきたレイの手がアドルバードの手を握り、そっと包み込んだ。

「一番変わったのは、あなたですよ。アドルバード様」

ふわりと微笑むレイを見て、アドルバードはおまえこそ変わったよ、と言ってやりたかった。騎士であつた頃、これほど穏やかに微笑むことはあつただろうか。レイが綺麗になつていくのは自分の影響力のせいだと胸をはって言えたらいいのに、アドルバードにはその自信がまだない。

「そうだと、いいな」

苦笑しながらレイの手を握り返す。

繋いだ手からぬくもりを分け合い、すぐにアドルバードとレイの手の温度は等しくなった。

レイはそれから黙っていた。アドルバードの様子が少し変だということとは、彼女にはお見通しだろうに。それでもレイは「話さないと選択したアドルバードのことを考えて聞かずにいてくれる。」

「——明日にはハウゼンランドへ戻るんだし、そろそろ部屋へ戻る

か」

東への懸念を告げるべきか否かしばし悩み——結局アドルバードは言わないことを選んだ。レイは「そうですね」とやはり追究せずにただ頷いた。

レイの部屋はリノルアースの隣で、その逆の隣がアドルバードの部屋だ。アドルバードの隣はルイである。婚約者とはいえ隣室になるのは避けられた。アドルバードとリノルアースが隣室なのは双子なのであまり問題視もされない。とはいえ気心の知れた国で、さらに王城でもなく領主の屋敷なので、部屋割に文句は言われないだろう。

「部屋まで送る」

送ると言うほど遠い距離でもないのにアドルバードがそう言い出したのは、少しでも長く一緒にいたかったからだ。それ以外に理由なんてあるわけがない。

中庭から部屋まではそれほど距離はない。とりとめもないことをぼつりぼつりと話していればすぐに着いてしまった。

「アドル様」

レイは扉の前でじつとアドルバードを見つめる。

「……どうした？」

アドルバードはレイには通用しないと分かっているにもかかわらず、微笑んだ。

「無理は、なさらないくださいね。……おやすみなさい」

少し心配そうに微笑むレイに、アドルバードは苦笑した。ああ、やっぱりバれているのかな、と。聡い彼女が、ヘルダムの指摘してきたことに気づいていないとは思えない。

「大丈夫、おまえが心配するようなことはないよ」

そう答えて、レイの額にキスを送る。以前よりも素直に受け止めるようになったレイに、アドルバードは心の中では心臓が飛び出るくらいにときどきしていた。こういう『恋人』らしいことに、まだ

あまり慣れていないなんて、馬鹿馬鹿しいだろうか。

いつだって、彼女の傍には落ちつかなさや愛しさが存在してる。

「……おやすみ、良い夢を」

そう言って微笑めば、レイは同じように微笑み返してくれるのだ。

25：遠慮なく喧嘩しようじゃありませんか

シェリスネイアとウィルザードの結婚式の翌日、昼過ぎになってハウゼンランド一行は国へ戻ることになった。

「じゃ、気をつけてな」

「またいらしてくださいな」

幸せそうな新婚夫婦の姿を見ながらアドルバードは微笑む。リノルアースはシェリスネイアに「もちろんよ」と返しながらもウィルザードを睨んでいた。シェリーを泣かせたら承知しないから、と言外に告げていた。

「今度はリノルとお兄様のですわね。招待状、楽しみにしてますわ」
ルイとリノルアースを見て微笑むシェリスネイアに、リノルアースはにんまりと笑った。その手には一通の手紙がある。

「来てくれなきゃ恨むわよ」

そう言いながら差し出したのは、シェリスネイアの言った「招待状」だ。きょとんとした顔で受け取るシェリスネイアに、リノルアースは楽しげに笑う。

「どうせだから手渡ししようと思って持ってきたのよ。癪だけどウィルザードと一緒に来て頂戴」

じろりとウィルザードと見てから、リノルアースはルイと微笑みあう。

「……これは、嬉しい誤算ですわね。必ず行きますわ」

シェリスネイアはリノルアースを見て、そして兄であるルイを見た。ルイはシェリスネイアの髪を撫でて微笑む。

「幸せに」

そう祝福の言葉を述べると、シェリスネイアは幾分幼い表情で「はい、お兄様」と答えていた。失われていた兄妹の時間が、短期間で戻っているようだ。

「そろそろ行かなければ、帰り着くのが遅くなりますよ」

少し遠慮がちに、レイが声をかける。ただでさえなんだかんだと出立が遅くなったのだ。これ以上先延ばしにすると、あとがキツイ。リノルアースも連れた帰路なのだから、無茶は避けるべきだろう。

「じゃあ、行くか」

名残惜しそうなリノルアースやルイを見ながらアドルバードがそう言うのと、リノルアースはこくりと頷いた。妙に素直なのは、気心の知れた人間しかない場だからだろうか。

「今度は私達がそちらへ行きますわ。ゆつくりさせていただく予定ですから、よろしくお願いしますわね？」

シェリスネイアがリノルアースの背を押すようにそう言って、ゆるるとリノルアースはルイに手を引かれて馬車へと乗り込む。元気で、と窓から声をかけると、静かに馬車は動き出した。

リノルアースの頬を風が撫でる。温かい風は、国へ近づくにつれ涼やかになっていくだろう。

馬車がどんどんと小さくなり、やがて見えなくなってもシェリスネイアはじつと馬車の消えた方角を見つめていた。

「……行ってしまいましたわね」

少し寂しげに呟くと、隣に立つ夫はあっさりとした口調で「そうだな」と答える。

「賑やかな方たちですから、いなくなると急に静かになりますわ」

素直じゃない物言いに、ウィルザードは苦笑する。

「すぐ隣の国だ。会いたければいつでも会える」

何も大陸の北と南に別れているわけじゃないんだから、そうウィルザードが諭すと、シェリスネイアも淡く微笑んで「そうですね」と呟いた。

「あなたと喧嘩した時には、アヴィラに帰るよりあちらに行った方

が楽そうですわ。リノルもいることですし、退屈しなくて済みますわね」

「……結婚早々、喧嘩した時のことを考えなくてもいいんじゃないか」

「あら、きちんと考えておくべきでしょう？ あなたと私で、絶対に喧嘩しない自信なんてありませんもの」

につこりと微笑む妻の言い分を、ウィルザードも否定できなかった。もともと意見が合わなかったからこそ繋がった縁でもある。これから一緒に生活していく中で、いつまでも仲良く——というのは無理だろう。そもそも意見もぶつけずに生活するのでは人形と暮らしているのと同じだ。

「まあ、行き先が分かるだけ楽だな」

駆け込み寺が初めから申告されているのであれば、迎えに行く側の心配ごとと減るというものだ。むしろあの義兄のいるアヴィランテに行かないだけマシと考えるべきか。

「ふふ、そうでしょう？ ですから、遠慮なく喧嘩しようじゃありませんか」

「奥さんに妙なこと言われてるなあ、俺」

幸せそうに微笑みながら「喧嘩をしよう」なんて、新婚夫婦の会話だろうか。それでもそんなことさえ幸せに感じるのだから、どうしようもない。ウィルザードは苦笑しながらシェリスネイアを抱き寄せる。シェリスネイアも素直にウィルザードの腕に包まれていた。「素直に怒れるって、こんな楽なことありませんわ。怒っていても笑っていても、あなたは受け止めてくださるんでしょう？」

ウィルザードの胸に頬を寄せて、シェリスネイアは呟いた。その艶やかな黒髪を撫で、ウィルザードは優しく囁く。

「ええ、そりやもういくらでも。可愛い奥さんのためなら」

茶化すようにウィルザードが答えると、シェリスネイアは少し恥ずかしげに頬をそめて「もう」と呟く。

どこからどう見ても仲睦まじい夫婦の姿だった。

馬車の中で、リノルアースはほとんどしゃべらなかった。

じつと外を見つめたまま、まるで人形のように大人しい。いつもならば誰よりもおしゃべりなリノルアースが静かだと、妙に不気味だった。

「……………憎たらしいわ」

そのリノルアースが、ぽつりと零した。

「え？ 何か言ったか？」

向かいに座っていたアドルバードが首を傾げて聞き返す。隣に座っていたルイには確実に聞こえていて、心なしかルイの顔色が青ざめている。

「憎たらしいって言ったのよ！ あの男シェリーの可愛いトコ全部かつさらっていくのよ！？ ああもうむかつく！」

赤みがかった金の髪を逆立ててリノルアースがわめき、アドルバードは啞然とした。予想していたルイは苦笑いを浮かべて目をそらした。

「…………リノル様は、随分とシェリスネイア様を気に入っていらつしやいますね」

一人だけ冷静なレイがそう問いかけると、リノルアースは「もちろん！」と答えた。

「私が男だつたらぜったいお嫁にもらうわ。だって可愛いもの」

きつぱりと言い切るリノルアースに、ルイは兄としても婚約者としても複雑な表情を浮かべた。

「…………まあ、いいんですけど」

慣れてますし、とぼつりと呟き、ルイは目を逸らした。

「何不貞腐れてんの。友情と恋愛比べるんじゃないわよ、馬鹿馬鹿しい」

一番はあんたに決まってるでしょ、素直すぎるくらいのリノルア

― スの言葉に、ルイは感極まって言葉が出なかった。

26：頼みがあるんだ

ネイガスからハウゼンランドまでの道のりは、そう遠いものではない。旅に慣れているアドルバードや体力のあるレイとルイはけろりとしていたが、さすがにリノルアースだけは疲れたようだ。忙しい中の訪問だったのもあり、向こうであまりゆっくりできなかったのも原因の一つではある。

「大丈夫ですか、リノル様」

王都に到着し、城の中へ入ったはいいものの、リノルアースはあまり顔色も良くない。心配そうにルイが尋ねると「大丈夫に見えるの？」と睨まれる始末だ。

「リノルは部屋に戻って休んでろよ。ルイも——と言いたいところだけど寝室への侵入を許せないのでレイ、一緒に行つてやつて」

「はい」

くすくすと笑いながらレイが頷き、ルイは若干不服そうな顔をしていた。婚約者としては付き添いたいだろうが、さすがに寝室まで入れるわけにはいかない。主従という壁もなくなった今は。

リノルアースを支えながら歩くレイの後ろ姿を見送りながら、まあそれは俺も同じか、とアドルバードは苦笑した。

「では、陛下に帰国の挨拶だけでもしておきますか」

同じように二人の背を見送ったルイが、アドルバードにそう促した。本来なら四人で挨拶に行くべきだろうが、愛娘が疲れたから部屋に戻ったと説明したも怒らないだろう。あんなためき親父でもリノルアースには甘い。

「そうだな、面倒事は済ませておこう」

ふう、とため息を吐きながらアドルバードはルイと共に父の執務室へ向かう。ついでに聞いておきたいこともある。リノルアースやレイの耳にはまだ入れたくないこと。

「——東の件、一応聞いてみるか」

「ええ」

国の情報を得たいのならば、国のトップへ聞くのが手っ取り早い。怠惰な国王でなければ自国に影響のあることは押さえているはずだ。そしてハウゼンランドの国王は怠惰ではない。アドルバードはそう思っている。

新興国であるレナンドが欲しがるもの。伝統と血筋。ハウゼンランドは国土こそ小さいが、歴史だけは長い。それこそそれだけはアルシザスに勝てるかもしれないくらいには。

「陛下のことですから、既に手は打つてあると思いますけどね」

ルイが苦笑いを浮かべた。国王はあの腹黒いヘルダムにも並べるほど狡賢い。まして人妻でも欲しければ力づくで、なんていう性格が本場で、それを王族にまで強要するのであれば被害に遭う可能性があるのはアドルバードやルイだけではない。愛妻家の国王も同じことだ。

アドルバードとリノルアースの母であるアデライードはまだ若く美しい。自分の身にも及ぶかもしれない危険を見逃すほど、国王は愚かでなかったはずだ。

「問題は素直に話してくれるか、だけだな」

父親の性格を知っているアドルバードはため息を零しながら歩を進める。足取りが自然と重くなるのは仕方ないと思う、と心の中で言い訳をした。

重厚な扉をノックして、アドルバードは一度深呼吸をする。

「アドルバードです」

名乗ると、中から「どうぞ」と声がした。声だけは優しい。

「失礼します」

「失礼いたします。お久しぶりです、陛下」

アドルバードに続いてルイが部屋へ入り、微笑みを浮かべながら

挨拶をする。国王はにつこりと微笑みながら二人を見た。

「ただいま帰りました」

「うん、おかえり。アドルバードは明日からしっかりと働いてくれ」
仕事はたっぷりあるから、という言葉に分かつてはいてもアドルバードはげっそりと頂垂れた。忙しい中の訪問だったので、出立前もそれほど仕事を片付けていけなかったのだ。

「ヴィルハザード様も。……というのは厭味かな。ルイも、お疲れ様」

苦笑するような国王の顔に、ルイも曖昧な微笑みで返した。国王という立場上、ヴィルハザードという本来の名を使うのは仕方ないことで、それでも「ルイ」と言い直してくれる国王を、ルイは嬉しく思っている。昔から何かとルイやレイを気にかけてくれたのも知っているのだ。

「いえ、分かっています。どちらの名でもかまいません。ルイ・バウアーとしての誇りは今も変わりませんが、ヴィルハザードの名によつて得たものも、理解していますから」

苦笑しながらルイがそう言うと、国王はただ一度頷いた。そして真剣な眼差しでアドルバードを見る。

「おまえもそれなりに交流関係を広げたことだ。もう耳には入っているんだろう。……東のことだ」

聞こうと思っていたことの核心に、国王の側から触れてきたことで、アドルバードは大いに驚いた。素直に教えてくれれば御の字、というくらいに考えていたのに。

「き、聞いてます。アヴィランテ王から」

「まあ、あちらさんも情報は早いだろうね。その東の国、レナンドの国王が近々うちにやってくると思う」

「はあっ!？」

驚きのあまりアドルバードは叫んだ。何を唐突に、と。国王は予想通りの反応だったんだろう。にんまりと笑って続ける。

「もちろん確定ではない。けれどおそらく確実だ。国王として、こ

ちらに挨拶にやってくるだろうね」

「歓迎するんですか？」

ルイが比較的冷静な様子で国王へ問う。様子からいって国王も東の国の評判を知らないわけがない。

「来ると言ってくるのを門前払いするわけにはいかないね。曲がりなりにも『国』だ。こちらも王国としての立場がある」

「そりゃ、そうだろうけど……」

釈然としない様子でアドルバードが呟いた。本音を言えば門前払いしてしまえ、と大声で叫びたい。

「それで、ルイ。君に頼みがあるんだ」

にっこりと、国王は微笑む。

「はい、なんでしょうか」

「簡単なことだよ。婚約者としてリノルからあんまり離れないでっただけ」

「それは……言われるまでもありません」

東の国——やってくるかもしれない国王が、噂通りの性格をしているというのなら、警戒するのは当たり前だ。あのリノルアースは大陸でも有名な美姫なのだから。

「頼みたいのはそれくらい。あとは各自で気をつけるように。今のところは仲良くするつもりのない相手だからね」

はあ、とアドルバードは答えながら退出しようと父に背を向ける。その背に、

「ああ、アドル。ついでにレイを呼んできてくれないかな」

にっこりと微笑みを浮かべたままで国王がそう告げた。アドルバードは振り返ってその顔を凝視する。

「レイは旅の疲れで部屋に戻ったりリノルについてますけど。伝言ならお聞きしますか？」

「本人の承諾を得たいんだよね。目の届かないところで話をされるのが嫌っていうなら、仕方ないから侍女にでも頼もう」

しかしながら机から動く様子のない父に代わって、アドルバード

が廊下にいた侍女にレイを連れてくるように頼んだ。レイ個人になんの頼みがあるって言うんだ、とアドルバードは頭の中で考える。

レイのことを信用して、東のことを伝えるのか？　しかしそれなら承諾を得る、という意味が通じない。そんなことを考えていると、レイはすぐにやってきた。

「失礼いたします。レイ・バウアー参りました」

涼やかな声がして、国王は嬉しそうに笑いながら「どうぞ」と応える。

「おかえり」

アドルバードやルイに向かって言った時とは違い、わずかに優しい顔でそう告げる。レイも微笑みながら「ただいま帰りました」と答えていた。その様はある意味でアドルバードよりも親子らしい。

「それで、お話があるとのことでしたが」

なんでしょうか、と用件を真つ先に聞いてくるのはレイの癖のようなものだ。無駄な会話は好まない。

「うん、ちよつとお願いがあつて」

「お願い、ですか？」

レイが首を傾げる。アドルバードにおいてはもう何がなんだか分からなくなってきた。ルイもただ黙って様子を見守っている。

「レイ・バウアー。騎士に戻る気はないかい？」

27：光栄です、国王陛下

何かを企んでいるような国王に、レイはただ冷静に微笑み返した。
「相変わらず、お優しいですね。陛下」

あまりにも突然すぎて、すぐに反応できずにいる婚約者と弟を差し置いて、今来ただかりのレイは何もかもを悟っているようだった。
そして国王は何も言わず、ただ笑みを深めるばかりだ。

「騎士に戻るって……そんなわけにはいかないだろ、何のために騎士を辞めたと思って――」

将来がかかっていることだけあって、アドルバードは咄嗟に話に割って入った。レイが騎士を辞めたのは、騎士のままでは王妃にならないからだ。いくら穏やかな国とはいえ、王の配偶者である女性が騎士であることは誰もが許さない。だからレイは剣を置いて、アドルバードを選んだ。剣聖という憧れも捨てて。

「だから、命令じゃないよ。お願い」

につこりと国王が笑い、アドルバードは言葉を失う。国王に『お願い』をされて断れる人間がどれだけいるだろうか。

「……陛下はリノルアース様の身を案じておられるんでしょう？
そして同時に私の身を守ろうとしてくださっている。言葉を隠してしまうと、ご子息に嫌われますよ」

苦笑しながらレイが国王へ問いかける。返ってきたのは微笑みだけだ。しかしそれは無言の肯定でもあった。

「……へ？」

呆然としたアドルバードが隣にいるレイを見る。

「レイと私が守る限り、リノルアース様に万一のことはしないでしょ。そして私が主のいる騎士へ戻れば、主の承諾なしの婚姻は結べ

ない。それ以上に、私が王城に滞在するための方便、でしょうか。父のいない屋敷より、警備の整っている城の方が安全といえば安全ですし」

そこまで説明されて、アドルバードは納得した。そしてルイも声には出さないものの、なるほどと言った顔をしている。

「賢いね、レイは。さすがというべきかな。その様子じゃ東の事情も知っているようだ。その坊主は教えなかっただろうに」

微笑みだけで沈黙を守っていた国王が拍手しながらそう呟く。坊主、と言われたことにアドルバードはカチンとしながらも、事実なのでまったく言い返せない。

「東に関しては、ヘルダム様から忠告をいただきましたので」

「はあ!？」

寝耳に水な情報に、アドルバードは声をあげた。ルイは苦笑しながら目を逸らしている。ありえないことではないな、とも思っているんだらう。

「アドルバード様にも言うておく、とおっしゃっていましたが、彼から君には言わないだらうからね。だそうです」

「あんにやろっ……」

こちらに煽るだけ煽って、本人にもこっそりと言っているあたり性格が悪い。

「兄上は姉さんのこと気に入ってましたからねえ」

とルイがぼつりと呟くものだから、アドルバードとしては心穏やかではない。東にも南にも敵だらけか。自覚しているし、警戒もしているとはいえ、この婚約者のモテっぷりにはときどき困る。

「ですが、私はアドルバード様の婚約者として彼を裏切るわけにはまいりません。ここで騎士服を着れば、非難はすべてアドルバード様が浴びることになります」

きっぱりと、そう言い切ったレイに国王は笑みを深めた。予想通りだとも言いたげな目に、アドルバードは顔を顰める。

「それしきのことで折れるほど私の息子は弱くないがね。私とてお

まえたちをどうしようなんて考えていないよ。せっかくレイのような素敵な子が義娘になるんだし。リノルやアデルにはね、南の離宮を使ってもらおうと思ってるんだ。そこにレイも泊まり込むといいよ」

「南の離宮、ですか」

リノルアースと王妃の名が出たことから、国王さえ東の国を警戒していることが分かる。南の離宮は今あまり使われていないが、何代か前の、病弱だった王妃のために作られた場所だ。日当たりもよく過ごしやすい。けれど城の中央からは離れているため、日常的には使われないことが多かった。

「理由なんていくらでもつけられる。君とアデルが共に過ごしていることでお妃教育の一環だ、と言えるからね。警護はディークに一任するから、君は好きな格好で過ごせばいいよ」

好きな格好で、という言葉が妙に含みをもたせている。レイはため息を零して「そういうことですか」と呟いた。人目のない、そしてあるのは見知った騎士団だけの中ならば、ドレスを着ていようが騎士服を着ていようが関係ない。国王は動きやすい格好で、リノルや王妃を守れと言っているのだ。いや、王妃は余計か。王妃はこの国の剣が傍らについているのだから。

「それは、それだけ私の腕が信用されている、ということでしょうか」

レイは国王を見て問うた。その青い瞳を見つめて、国王は笑みを消す。

「私が真に信用しているのは、君たちバウアー家の人間だけだよ。剣の腕も、人としてもね」

国王の言葉にレイは静かに頷き、そしてドレスであるがゆえに跪けないことを残念に思った。相変わらずこの国王は素晴らしい。

レイはドレスの裾を少し持ち上げて、ゆつくりを腰を折る。

「光荣です、国王陛下」

凜とした声は、静かに落ちる。

「アドルバード様と共にあるにあたり、私に足りないことは多くあると思います。その上で、王妃様より教えていただけることがあるのならば、よろこんでご指導いただきたく思います」

それは、遠まわしな了承の言葉だった。

「ありがとう、レイ。助かるよ」

ふわりと微笑む国王の顔は、レイの最愛の人の顔に似ていた。ああ、やはり親子だな、なんてレイも笑う。

「勝手な判断をしてしまつて、申し訳ありません。アドル様」

ずっと黙っていたアドルバードに、レイは苦笑しながらそう言う。アドルバードも同じように苦笑いを零して、「いいよ」と答えた。南の離宮は城の中といえば中にあるが、中央で生活し仕事しているアドルバードと会うことは容易くない。リノルアースの警護、という意味がついている限り、レイが自ら南の離宮から出ることはないだろう。

「俺も、おまえの安全が保障されている方が気が楽だ」

「私はそんなにか弱くないですよ」

「それはもちろんよく知ってるけど、俺が婚約者としておまえの心配をするのは別だろ」

アドルバードの言葉に、レイは一瞬息を呑んだ。ルイは居たたまれない様子で目を逸らし、国王はくつくつと肩を震わせて笑いを堪えている。

「なんだよ真実だろうが！」

自分でも恥ずかしいことを言った自覚がじわりと沸き上がったアドルバードは、八つ当たりのように父親に怒鳴る。その途端にはじけたように国王は笑い始めて、先程までの張りつめた空気はどこかへ消え去ってしまった。

「なんていうか、昔に増して周囲の目を気にしませんよね、アドル様は」

はああ、とため息を吐き出してルイが呟く。レイもフォローしてくれない。

「素直で何が悪い！」

「私としても少し周囲を確認していただきたいところなんです」

レイにまで追撃され、アドルバードはさすがに口籠もった。あう、と次の言葉を探して口をぱくぱくさせる。

「まあ、それがアドル様と言えなくはないですけど」

少し恥ずかしそうにレイが微笑むので、アドルバードとしてはまあいいかと片付けてしまう。誰にどう言われようが、彼女に嫌われないのならどうでもいい——なんて、そんなところもまるで変わっていない、というのは周囲の評価だった。

28：だから、おまえが剣聖になれ

日当たりの良い南の離宮は、寒いハウゼンランドにいるのが嘘に感じるようにあたたかい。その離宮の一室に部屋を用意されたレイは、一人で着替えを済ませていた。何人も侍女に手伝ってもらわねば着ることが出来ないようなドレスではない。レイの長い足を強調するような細身のズボンに、真っ白なブラウス。その上に黒のベストを着て、腰には剣を下げていた。伸びた銀色の髪は首の後ろで一つに束ねる。レイにとってはとても動きやすい私服だ。

鏡に映る自分を見て、レイは苦笑した。これでは王子の婚約者というよりも、どこぞの侍従のようだ。長い髪がかろうじて彼女が女であることを教えてくれる。せめて少しは女らしく、と淡い色の口紅を塗った。中性的な顔立ちの彼女は髪が長くても格好次第では男にも見える。

「……男に見える方がいいのかもしれませんが」

この離宮に居る限りは、それも余計な心配だろう。レイは口紅を化粧台に置いて部屋を出る。このところ不機嫌な姫君の相手をしなければならぬ。

朝食は決まって、離宮の中にある小さな植物園でとることになっている。ちらほらと花が咲いていて、大きな窓からは陽光は降り注いでいる。植物が好きな王妃はことさらにこの植物園を気に入っていて、朝食やお茶の時間はここで過ごししょう、と有無を言わず決めたのだ。

「おはようございます、リノルアース様、アデライード様」

この格好では淑女の挨拶も似合わないので、レイは騎士のように二人に礼をした。王妃であるアデライードはにこりと微笑むが、リ

ノルアースは不機嫌を隠す様子もなくむっつりとしている。

「おはよう、レイ。今日も一段とかつこいいわ。でも私のことはお義母様かアデルと呼んで、とお願ひしたはずだけど？」

「ありがとうございます。アデル様」

義母と呼ぶのはまだ抵抗があるので、レイは微笑みながら言い直す。アデライードは満足そうに頷いた。

「……リノル様、まだ怒っていらつしやるんですか？」

「ええ、そうよ。だってお父様もアドルもレイも勝手すぎるわ。どこの王様が知らないけど、私だって自分の身を守ることくらいできるもの。のけものにされるのは一番嫌いよ」

ふん、とレイを顔を合わせることもせずにリノルアースは黙り込む。リノルアースはそう言うが、さすがに大人の男性に襲われたらひとたまりもないようなほど彼女は非力だ。しかし父や兄の愛情を素直に受け止めるよりも勝手に決められたということが許せないらしい。

それに――……。

「アドル様はお一人になってしまいましたが、その分公務に励んでいらつしやるということです。合間には様子を見に来て下さると思いますよ」

レイがやんわりとそう告げると、ぴくりとリノルアースの肩が揺れた。双子の兄を分かりにくいながらもしつかりと慕っている彼女は、アドルバードが一人きりでいること嫌らしい。ルイは朝食をとった後にすぐにこちらの離宮を訪ねてくるが、王子であるアドルバードは公務があるのでルイのように入り浸ることができないのだ。

「無理にでも時間を作って会いにくるのは当然でしょ。ここにはレイもいるんだから。婚約者そっちのけにしていたら怒ってやるわ！」

どうやらリノルアースは自分を放置されるということよりも、アドルバードとレイのことを憂いてくれているらしい。そのことが分かると、レイはくすくすと笑った。

「大丈夫ですよ、長く一緒にいるだけが愛ではないと学びましたか

ら。今は少し離れていてもお互いに頑張らなければならない時期なのでしょう」

むしろアドルバードとレイは近くにすぎたからこそに見失ってしまうものも多い。こうしてお互いに距離を置くことも時として必要なのだと、今では冷静に思えるのだ。

「まったく、この子はいつまでたっても兄離れしないのだから。そんなことではルイに嫌われてしまうわよ？」

アデライードが呆れたようにそう諭したが、リノルアースの耳には届いていないらしい。用意されている朝食を食べたあとも、リノルアースは納得していないような顔をしていた。

名目上はお妃教育、ということになっているが、レイがアデライードと一対一で過ごすことはなかった。アデライードと言えば「レイならそのまま王妃になっても大丈夫よ」と言うだけで部屋に戻り、自分が好きなように一日を過ごしている。なのでレイはもっぱらリノルアースとルイの三人で過ごすことになっていた。あまり一人になるな、というのは父のデーイクの言いつけである。

「リノル様、そういえばアドル様からこれを預かっていたんです」
ルイがやってきて、そのまま植物園で談笑していると、ルイはそう言いながらポケットから小瓶を取り出した。中には小さな金平糖が入っている。

「……なによそれ、ご機嫌とり？　ていうか妹じゃなくて婚約者にプレゼントを用意しなさいよ」

むすつとしながらも、リノルアースはどこか嬉しそうにそれを受け取った。レイに何もないのは当然だ、意味もなくプレゼントを贈れば「無駄遣いはどうかと思います」と冷たい反応があるに決まっているのだから。

「ルイ、午後もあるのか」

これはいつもの質問だった。朝食後、夕食まで一緒にいるのはこ

こ数日のお決まりであり、確認を含めたこの質問もまたお決まりのものだった。続く誘いの言葉も一緒だ。

「ええ、いる予定です」

「では手合わせを」

「はい」

ルイは嬉しそうに笑って答えた。レイはここしばらく剣を握ることができなかったたので、感覚を取り戻すためにもルイと手合わせをすることにしている。お互いに騎士団の誰かに気軽に手合わせを願っていることのできなくなった身なので、本気でやりあえる時間はありがたいものだった。

「毎日毎日、本当によく飽きないわね」

呆れたようにリノルアースが呟くが、本当は幼いころと同じようなこのやりとりが嬉しいらしい。四人がもつと若かった頃、ルイが城へやってくるようになった頃はアドルバードを交えて、剣の練習をするのが常だった。

「日々鍛錬してこそそのものですからね」

レイが剣に触れながら答える。王妃として剣を振るうことができないのは異例かもしれない。けれどアドルバードはそんな自分を選んでくれたのだから、辞めるつもりはなかった。時に世間の目を気にして自重することは必要であっても。

「……それで、私の婚約者様はいつになったら私の未来のお姉さまに勝てるのかしらね？」

意地悪な問いに、ルイは苦笑いを零すだけだ。打ちあふ数はその日によってまちまちであるし、時にはルイがレイの剣を弾くこともある。けれど最終的な勝率はいつもレイの方が上であった。決して女だからとルイが手を緩めているわけではない。

「本当ですね。私ごときに勝てなくては、剣聖の名を与えるわけにはいきません」

「いつそ姉さんが剣聖になればいいんですよ」

冗談めかしてルイがそう言つと、レイは苦笑した。いや、苦笑と

いうよりも、少し悲しげな微笑みだった。

「剣聖というのはもはやバウアー家の異名のようなものだ。おまえがバウアー家を継ぐのなら、剣聖はおまえのものだよ。父上もそう考えている。何よりこれから発展していくだろうハウゼンランドには、剣聖が必要だ」

私は王妃として、この国を支えていく。レイの決意はもはや揺るぎないもので、ルイは真剣にその言葉を受け止めた。

「だから、おまえが剣聖になれ、ルイ。アドルバード様にもそれは必要となるだろうから」

その静かで芯のある声は、まるで強くなれ、と言っているような気がした。

29：レイは意地悪よねえ

剣を握ったのは、もはや運命としか言いようがなかった。

父も母も女だからという理由でやめるとは決して言わなかった。

父は豪快に笑って、さすが俺の娘だなと言い、母は穏やかに微笑んで見守っていた。ハウゼンランドで誰よりも強い父から稽古を受け、女であることもハンデにならないようにと様々なことを叩きこまれた。相手の動きの読み方、その場を満たす空気の読み方、人の気配の探り方、身体はどこを斬ればどう動けなくなるのか。それは騎士団で学ぶよりもより本格的なものばかりだった。

剣は、私の――レイ・バウアーの誇りだった。

「レイは意地悪よねえ」

リノルアースは頬づえをつきながら、そんなことを零す。南の離宮にある中庭で稽古をする二人をちらりと見ながら、暇を持て余しているようだった。

「意地悪、ですか」

苦笑して答えれば、リノルアースは「そうよ」と不貞腐れる。

「レイがああ馬鹿に剣聖になれなんて言うから、すっかり稽古に熱中しちゃって。デイクもデイクで楽しそうだし」

先程から稽古を続けているのは、ルイとデイクだけだ。たまにはドレスを着なさい、とアデライードやリノルアースから言われたレイは、珍しくドレスを着て見学している。男装ばかりしているとドレスを着た時の作法も忘れてしまいそうになるので、ちょうどいいのかもしれない。

「ルイは父に稽古をつけてもらうことはあまり多くありませんでしたし、いいじゃないですか。あれもアヴィラの内戦で随分と経験を積みましたから、父も楽しくて仕方ないみたいです」

「内戦ねえ……あんまり話さないわね、その時のことは」

リノルアースの青い瞳がどこか遠くをぼんやりと見つめて、小さく呟いた。アヴィランテの内戦ではルイがとても活躍していた、ということだけ伝え聞いている。本人は曖昧に微笑むだけで詳しくは話してくれないのだ。

ルイは懸命にディークに斬りかかるが、どうも軽くあしらわれてしまう。焦りが太刀筋に出ているようだった。だがその焦りの中にも、戦いを切り抜けてきただけの強さを感じるのだろう、ディークは息子の成長ぶりが嬉しくて仕方ないようだ。

「実際、ルイは強いと思いますよ。穏やかなハウゼンランドでは、彼が内戦で経験したような戦いは身につきませんからね。稽古ではなく本気の殺し合いになれば、私より遥かに強いでしょう」

「そうかしら、稽古ではレイに負けてばかりなのに、実戦でそう上手くいくもの？」

疑うリノルアースの目に、レイは苦笑する。

「稽古の場合、私は相手の癖や行動パターンを考えてやっています。だから私が良く知る相手であればあるほど、私は負けることはありません。父は例外ですけどね。実際の戦場では、そんなことをしている余裕もない。情報もない。もし私とルイが他人で、戦場で相まみえたとしたら——負けるのは私でしょうね。力の差もありますから」

信じられない、と言いたげにリノルアースは目を丸くした。彼の剣の腕は知っていても、気弱な性格を熟知しているせいか、イメージが結びつかないのだろう。

「血筋だけでは、剣聖は継げませんよ。まさに剣聖の名は、ハウゼンランドの剣そのものですからね。ルイは周囲が思っている以上に強い男です」

「性格だけじゃ、とてもそうは見えないわね」

「そうですね。たぶん、ルイに足りないのは剣の腕ではなく、心の強さなんでしょう」

幼少期に甘やかしすぎたんでしょうか、と苦笑するレイを見ながら、リノルアースは微笑む。

「心配しなくても大丈夫よ、レイ。結婚したら私が尻叩いて鍛えてあげる」

「期待しておきます」

「まかせなさい。あれよね、こう、押しが足りないのよ！ 押しが！ 男なんだからたまには強引なところがあってもいいと思うの」

それは恋愛のことじゃありませんか、と思いながらレイは黙っていた。確かに通じるところがある。というより、恋愛面で強くなれば自然と精神も鍛えられるのではないだろうか、と苦笑いを零す。なんといいっても、相手はこのお姫様だ。

「……そういうば、アドル、来ないわね」

ちらりとレイを見ながら、リノルアースが呟いた。

「忙しいんでしょうね。通常の政務に加えて、他国の王が訪問するともなればいろいろと準備しなければなりませんし」

「有能なレイがサポートにいないしね」

「アドル様なら、私がいなくとも大丈夫ですよ」

くすりと笑みを零しながらレイは会話を切る。リノルアースは釈然としないといった顔でレイを見つめていたが、彼女はその視線に気づきながらも受け流してしまふ。まさか倦怠期というやつだろうか——なんて要らぬ心配をしてしまうくらいには。

「レイ様」

にこにこ上機嫌でやってきたのは、アドルバード付きの侍女であるニーナだった。長年仕えているので、もちろんレイとも顔見知りである。

「お待たせいたしました、殿下からのお返事です」

そう言いながらニーナが差し出したのは、一冊のノートだった。

「……ノート？」

「ええ、アドル様がうるさいので、情報交換もかねてお互いに書いているんです」

「それってつまり交換日記じゃないの」

心配したのも無駄だったわ、とため息を零しながらリノルアースが笑った。こちらの知らないところで、きちんと仲良くやっていたらしい。

「殿下はすっかり禁断症状が出ていらっしやいましたけどね」

につこりとニーナは微笑みながら、交換日記にも書いていない情報を零す。向こうには「レイ様は全然平気そうでしたよ」なんて言っているのかもしれない。まったく、とレイは呆れながらノートを開いた。リノルアースも横からこっそり覗く。

噎せ返るような甘い言葉でも並んでいるのだろうか——と思わせながら、中身は本当に近況報告ばかりだった。今日は何をして、こんなことがあって、今後はこうする予定。端々には会いたいといった言葉もあるが、予想外の内容にリノルアースは興味を失くしたようだ。

けれど最後には必ずこうある。

——愛を込めて。

その一言に詰まった想いと葛藤を想像しながらレイは微笑み、ノートを閉じる。

「夕食後までには書いておく。あまり無理なさらないように伝えてくれ」

「はい、もちろんですわ」

ニーナは伝言を受け取ると、それでは、と離宮から去っていく。時には花を一輪持って、時には甘い菓子を持って、本当は自分で届けたいと願う主に代わって、アドルバードとレイのかけ橋になっているニーナは、その仕事を楽しんでいるようだ。

「……レナンド王の訪問日時が決まったようですね」

ため息を零して、レイが呟いた。その言葉にリノルアースの顔色

も曇る。

「思った通り、急な日程のようです。その間、リノルアース様は離宮から出ないように、とアドルバード様と陛下が」

「レイは？」

「私も、ですよ。予定外のことがなければ、ですけどね」

外交に関わりのない姫はあまり顔を出さないのが普通だし、レイはまだ婚約者という立場しかない。王妃であるアデライードは「二度挨拶に出なければならぬかもしれないが、それ以上のことはしないはずだ。」

「それで、いつ来るの」

わずかに緊張を孕んだ声で、リノルアースが問う。

レイは静かに目を閉じて、答えた。

「十日後です」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2744k/>

可憐な王子の結婚行進曲

2011年10月18日23時32分発行